第2章

エジプトの中央集権性

——ガマール・ヒムダーン著『エジプトの個性』をめぐって——

はじめに

本稿は，ガマール・ヒムダーン(Jamāl Ḥamdān)著『エジプトの個性』(*shakhṣīya miṣr*) をテキストに用いて，エジプトの中央—地方関係，特にエジプトの中央集権性をめぐる言説の再検討を行なう[1]。ヒムダーンとその著作を取り上げた理由を説明する前に，その議論の前提として，まずエジプトの中央—地方関係をめぐる研究状況，そして不十分ではあるが，本書の主題であるイランにおける中央—地方関係との比較をめぐる問題について解説しておきたい。

(1) エジプトの中央—地方関係をめぐる研究状況

筆者は，近年の日本におけるエジプト研究をレビューした論稿において，中央—地方関係に関する研究の進展について積極的な評価を示した[2]。そこで挙げた研究のなかで，特に伊能武次の論文「エジプトの地方・中央関係」は，このテーマが含む多様な問題点を提示しており，問題の概観を知るうえで有益である。この論文のなかで伊能は，政治学研究の立場から，中央—地方関係の今日的な研究意義を次の2点にまとめている[3]。第1は，「中央—地方関係の研究が一国の政治システム全体の理解にとって不可欠な要素になっ

てきた」という研究状況の変化である。第2は，構造調整政策に伴う中央政府の行政的規制の緩和やイスラーム運動の過激化による地方の治安問題の深刻化といった「中央―地方関係が置かれた政治的・経済的なコンテキストの変化」である。

以上のうち，後者がもつ時代的意義は，まさに研究の実践的な意味を示すものといえるが，ここでは前者の研究史上の意味についても関心を払っておきたい。それは，伊能が，中東政治研究における方法論的問題を扱った別の論文で問題提起している，国家と社会の関係をめぐる問題系，すなわち「国家中心的アプローチ」と「社会中心的アプローチ」の総合化という問題系と関係している(4)。

この問題との関連で，先の筆者のレビューでもふれた加藤博の論文「エジプトにおける社会経済変動と空間編成の変容」は，社会経済史の立場から興味深い研究史批判を行なっている。加藤は，エジプトの近代史研究を支配してきた外国人歴史家の「近代化論的史観」とエジプト人歴史家の「民族主義史観」が，いずれも「空間の軽視という思考枠組」を共有している点を次のように批判している。すなわち，二つの歴史観にともにみられる「重層的な社会構造を軽視し，平板なエジプト社会像を創り出すイデオロギーと，エジプト社会における『地方』差を量的差異のなかに解消し，空間の質的差異を軽視する中央集権のイデオロギーとは，その基本的思想枠組において同根なのである」。こうした二つの歴史観のイデオロギー的体質を補強したのが，文献資料の首都カイロへの集中という史料事情であり，これは「分析対象であるエジプトの水利社会としての中央集権的体質」を反映している，とする(5)。

加藤の主張は，「エジプト社会は従来強調されてきたほど，社会構造と空間編成において，中央集権的でもないし，等質的でもない」という点に要約されるが，ここで注意したいのは，以下の2点である。まず，第1は，中央―地方関係の問題のレベルを「社会構造」と「空間編成」の二つに区別していること，そして，第2は，「中央集権性」と「等質性」の間の密接な相関関係について言及していることである。前者は，中央―地方関係といった場合に含

意される，「中央」と「地方」，「中心」と「周辺」という二つの異なる局面を区別する問題に関わってくる。これは，本書の序論で編者が解説している大きなテーマに含まれる問題である。加えていえば，都市―農村関係というもう一つの局面も，この中央―地方関係に含意される二つの局面と密接な結びつきをもつはずである。

中央―地方関係といった場合，実はそこには，政治体制や行政機構，それと関係をもつ社会階層構成の問題から，地域的な個性・風土の多様性をめぐる問題まで，位相を異にする様々な問題が包括されており，さらにこれらの問題は，首都―地方関係や，一国の都市システムをめぐる問題，農村―都市関係などの諸問題と複雑な結びつきをもっている。本稿で紹介するヒムダーンの研究は，エジプトを事例として，まさにこれらの問題を文字通り縦横無尽に論じた作品である。その場合，筆者がヒムダーンの議論に注目するのは，後でみるように，上述の中央―地方関係の多様な諸局面と，互いに密接な関係をもつ「中央集権性」と「等質性（同質性）」を，それぞれどのように関連づけて論じているかという点である。

(2)　中央―地方関係をめぐるイランとエジプトの比較の視座

本稿では，前項で述べたように，エジプトの中央―地方関係を特徴づける問題の一つとして，中央集権性の問題を取り上げる予定であるが，その場合しばしば言及される議論に，灌漑社会論，あるいは水利社会論がある。この議論は，アジア的生産様式や東洋的専制といった概念と結びついて，一時期隆盛をきわめた。そしてその後，いくつかの批判がなされたが，依然として現在もエジプト社会研究において根強い影響力を保っている。

さて，このアジア的生産様式あるいは東洋的専制をめぐる議論において，実はイランもエジプトに負けず劣らず，これらの概念が適用される代表的なあるいは典型的な事例として選ばれてきた。イラン研究者でない筆者には，こうした議論がイランについて具体的にどのように展開されているのか，その全体を概説することはできないが，その最近の代表的な論客と思われるア

ブラハミアン (Ervand Abrahamian) の議論を手がかりに，エジプトとの比較を行なう場合の論点を示してみたい。

ここでは，彼の「ヨーロッパ封建制と中東的専制」という論文を取り上げてみよう[6]。この論文でアブラハミアンは，最初に封建制ヨーロッパと中東の伝統的政治体制を比較するマキャベリ以来の議論を紹介した後，「アジア的専制」の社会経済的基礎を重視するマルクスとエンゲルスの説に注目し，特にイランを事例として社会の細片化(fragmentation)と専制との関係を論じている。すなわち彼は，19世紀カジャール朝を事例として，専制の土台となる社会の細片化が，(1)少ない降雨量のため人口が小共同体に分散するという地理的要因によって発生し，さらにこの地理的孤立は，(2)商業と交通の未発達，(3)言語・宗派の分断的構成，(4)部族や家族，街区や同職組合などの社会的組織化によって強化されてきた，と主張する。そして，こうした「複雑化したモザイク」あるいは「共同体的分散性」は，稀少資源をめぐって小共同体間に恒常的な「宗派紛争」(コミュナリズム)を発生させる。その結果，そこでは階級政治，すなわち階級意識に目覚めた合理的な政治行動が排除され，社会はアナーキー状態に陥る。ここに，カジャール朝が，強大な常備軍や発達した官僚制をもたずに，専制政治を行なうことができた背景があるとする。

こうした彼のイラン伝統社会論（いわゆる「モザイク社会論」）に対しては，多くの批判が予想されるが[7]，ここで言及したいのは，エジプト伝統社会論との異同である。後論のように，伝統的なエジプト社会論は，やはりイランと同様に沙漠性の乾燥気候の風土論と灌漑社会論から議論が開始される。しかし，そこから導き出される結論は，たしかに同じく専制政治であるが，そのアジア的専制は，イランとは対照的に過重な官僚機構を抱えた中央集権国家に支えられ，同質的な国民からなる等質的な社会の上に君臨している。すなわち，イラン伝統社会が，地方的分散（そして地方分権）とモザイク的多様性によって特徴づけられるのに対して，エジプトは，中央集権性と同質性の国とされる。前述の箇所で，加藤がエジプト歴史資料の中央集中性に言及したのに対し，例えば，第７章の八尾師論文が示すように，地方分権的で地方色

豊かなイランは，豊富な地方史・誌資料を誇っている。

さて以上のように，乾燥気候と灌漑社会という風土論で開始された議論が何故このように異なる結論を導くのかといった問題において，最後に指摘しておきたい点は，エジプト側における実証研究の立ち遅れである。例えば，灌漑制度と社会の政治的編成との関係について，近代以降に限ってみても，意外なことに実証的な研究が貧弱である。一例をあげれば，灌漑制度の変容と私的土地所有権の成立を背景にしたエジプトにおける大地主制の成立の議論において，イランにおいてカナート建設と地主制の形成の密接な関係をめぐる実証研究に匹敵するような研究成果は生みだされてこなかった(8)。古代以来のベイスン灌漑（ナイル川の自然氾濫を利用したベイスン〈水盤〉による灌漑様式）から通年水路灌漑への移行が行なわれた19世紀エジプトにおいて，公共用水路建設という灌漑制度改良事業に対する地主・富農層の積極的な参加と，彼ら自身の私的水路建設による末端レベルでの用水の支配が，彼らの土地支配の基盤となった状況に関して，（例えば，精緻な土地制度史の研究と比較して）実証的な研究がこれまで十分に蓄積されてこなかったように思う(9)。

第1節　民族主義（ワタニーヤ）の地理学者，ヒムダーンの個人史

「はじめに」で述べたように，本稿は，ヒムダーンの主著『エジプトの個性』を素材にエジプトの中央集権性を考察することを目的にしているが，その本論に入る前に，議論の前提として，この節で著者の個人史と主要著作を紹介しておきたい。すなわち，著者の個人史と彼の研究テーマとの関係に注意を払いながら，現代エジプト（あるいは，アラブ）知識人としての彼の研究生活の時代的意味に関して考察を加えたいと思う。その理由として，この節でみるように，ヒムダーンが大学を辞め，知的な「隠遁」生活に入るに至った背景には，当時の政治体制と社会に対する彼の厳しい姿勢があり，それは本稿で扱うエジプトの中央集権性（そして「ファラオ的専制」）をめぐる彼の議

論に微妙な陰影を与えているように思えるからである。まず，彼の死が当時のエジプトの知的社会にどのようなインパクトを与えたのか，当時の状況を再現してみたい。

1．ヒムダーンの死とその「隠遁」

ガマール・ヒムダーンは，1993年4月17日，ドッキ地区（大カイロ・ギーザ県）の自宅で亡くなった。その死亡記事が新聞に載った翌18日は，古代からエジプトに伝わるシャンム・ナシーム（春の訪れを祝い，そよ風の香りを楽しむ祭り）の休日であり，またこの日は，コプト派キリスト教徒にとって復活祭（'īd al-qiyāma）に当たった。エジプトの風土が生みだしたこの春祭りの日，人々は全国各地で河畔や湖やバラージ（堰堤）などの行楽地に出かけ，暖かな陽光の中でナイルの川風を体全身に受けとめて，春の気分を満喫する。しかし，この年のシャンム・ナシームは，二つの事件で記憶に残る祭りの日となった。一つは，前述のナイルに育まれたエジプトの風土の思想家，ヒムダーンの死であり，もう一つが，近年，政府と流血の抗争を続けているイスラム運動の「テロリスト」による脅迫事件であった。

新聞報道によれば，エジプト南部の観光都市アスワンでシャンム・ナシームを祝う人垣に爆発物を投げつけようとした5人の「テロリスト」が逮捕されたという(10)。犯行の動機は，記事では明らかにされていないが，ここ数年，特に上エジプト地方を中心に，イスラームに反するビドア（異端的現象）と見なされた演劇や舞踏など民間芸能の活動に対する攻撃や脅迫が相次いだこと(11)を思えば，ある程度の予想はつく。しかしそれにしても，新しい年の春を祝うナイル川の祭日に，ヒムダーンの死と襲撃未遂事件が同時に起きたことについては，何か単なる偶然とは思えないものがある。イスラーム運動勢力の一部による「反イスラーム的」文化の排撃活動が象徴する，現代エジプト（あるいは現代アラブ世界全体）が抱える思想的危機の状況に対し，ヒムダーンの死は，特別な時代的意味をもって当時の知識人に受けとめられたの

である。

当時出された数々の追悼記事や論説のすべてに当たり，ヒムダーンの死の反響を網羅的に紹介することは，筆者にはできないし，またそのための資料的準備もない[12]。ここでは手元にある数少ない資料から，ヒムダーンの死の反響とその意味を考えてみたい。まず，最初に，ガーリー・シュクリー(Ghālī Shukrī) の「我らの時代のエジプト人」という論説を取り上げてみよう。これは，彼が編集長を務める代表的な文芸雑誌『アル・カーヒラ』（カイロ）のヒムダーン追悼特集号(第126号，1993年5月)「エジプト文化におけるガマール・ヒムダーン」の巻頭に置かれた論説である[13]。

この論説の表題にある「我らの時代」という言葉は，ヒムダーンの死と現代のエジプト知識人との関係をよく表している。ここでシュクリーは，知識人の世代論を展開し，ヒムダーンと共有した「我らの時代」の歴史的な意義を強調している。すなわちそれは，ヒムダーンの一つ上の世代が，1919年革命が生んだ「エジプト民族主義の子供たち」であったのに対し，彼らの世代が1952年革命の世代であるという特徴づけである[14]。

こうした世代論を通じたヒムダーンへの共感は，同誌の特集号に寄稿した他の14名の知識人にも共通したものだろう。その一人，ハサン・ハナフィー（Ḥasan Ḥanafī) は，その「帝国主義の戦略と解放」という論説で，ヒムダーンは民族解放の時代，「60年代の夢」に，すなわち遺産（turāth）を出発点とする解放の思想の試みに地理学から参加した「60年代の世代」だと語っている[15]。時代認識と結びついた世代論は，知識人の自己認識の主要な方法である。ヒムダーン自身も，知識人と時代の関わりについて次のように述べている。彼にとって，革命の時代が終わった1970年代以降は，「革命が封建制と資本主義の同盟の手に落ち，60年代の軍人と知識人の同盟に取って代わった」反動の時代だった。そして「70年代を経て，最終的には，この同盟も役割を終え，代わりに軍人と資本家との間に同盟が結ばれるようになった」と[16]。

さて，ヒムダーンが多くの知識人の共感を集めたのは，時代を象徴する思想家としての傑出性だけではなく，こうした移ろいゆく時代に流されない彼

の生き方に対する敬意の表れだった。経済学者マフムード・アブデルファディールは，最近出された随筆集『未来との対話』のなかで次のように述べている。「ガマール・ヒムダーンは，いくつものシンボルが凋落し，多くの価値や意味が地にまみれた社会において，今も輝きながら残っているシンボルだった。ガマール・ヒムダーンは，『石油の時代』（al-ḥiqba al-nafṭīya）に対する反抗のシンボルとして我々の歴史に残るであろう」[17]。

再びシュクリーの言葉を借りれば，多くの学者が飛行機に乗って一流ホテルに泊まり，多くの国際会議に参加する，この「ペトロダラーの時代」（zamān al-bitrūdulār）にあって，ヒムダーンは，「修道僧の僧坊より粗末な慎ましい家」で清貧の生活を送った。彼は，「人生の労苦から身を護る結婚と家族の形成を拒否し」，トランジスタ・ラジオさえないわずか2部屋の小さなアパートで，洗濯や掃除など身の回りの仕事を人に委ねることなく，自らが秘書役を務め，1日12時間あるいは18時間も机に向かう研究生活を送った[18]。こうしたヒムダーンの暮らしぶりは，死後に報道されたアパートの内部の写真などから偲ぶことができる。このような報道がなされたのは，彼の死の原因をめぐって陰謀説も含めて疑念がもたれ，検察の調査が及んだ結果であった[19]。

ヒムダーンは，1963年に大学を辞めた後，93年の死に至るまで30年間，このアパートで「隠遁」生活を送った。もっともヒムダーンの弟子を自認するアブデルファッターフ・ゴネイミー（‘Abd al-Fattāḥ Maqlad Ghunaymī）は，『歴史の記憶のなかのガマール・ヒムダーン博士』のなかで，こうした「隠遁説」を批判している。彼は，マスコミの報道記事を批判し，博士の家を訪ねる者がなかったなどということはなく，その門はいつも開かれていた，また学者にとって「隠遁性」（al-in‘izālīya）はむしろ不可欠なものだ，と述べている[20]。

ただし，彼の金銭に対する潔癖な態度[21]や，狷介ともいえる時の権力に対する姿勢は，当代のエジプト（あるいはアラブ）知識人にとって「隠遁」の意味を積極的に省察する材料を提供しているように思う。例えば，作家ユースフ・カイード（Yūsuf al-Qa‘īd）は，そうした逸話の一つを次のように伝えて

いる。それは，「エジプト民族の歴史における陥穽であった」キャンプ・デービッド合意が1979年に締結された時点を境にして，ヒムダーンは，政府関係の建物に決して足を踏み入れようとはしなかったという逸話である[22]。ヒムダーンは，国家権力や世俗の社会に対し頑に距離を取りつづけながら，しかし同時代の社会に対する積極的な関心を失うことなく，厳しい社会批判を著作のなかで何回も繰り返している。後に述べるように，主著『エジプトの個性』の主題は，近代以降も続くエジプトの専制的支配の伝統に対する批判であったし，これは初版が書かれた当時のナセル体制への批判にとどまらず，民主化の問題として今日的な意味をもっている。また，同書の第3部「経済的個性」では，現在の対外債務問題を憂慮し，インフィターフ（門戸開放）政策に対して激しく批判を展開している。

エジプト知識人として異例ともいえるその「隠遁」の人生，複雑で奥の深い人格，そしてその膨大な著作について，あるいはそれらの相互の関係などをめぐって，ガマール・ヒムダーンの全体像を描きだす作業は，おそらくかなり時間と労力を要するものとなろう。またこの作業は，ヒムダーンをめぐる多様な言説や彼自身の膨大な著作など情報量の多さの問題に加えて，彼の精神の内面を明らかにする資料上の困難に阻まれるであろう。例えば，以上で若干ふれたところの「世俗」の社会に対する彼の徹底した潔癖な態度は，それを暗示している。

ただし，すでに述べたところから，ヒムダーンの「隠遁」が，彼の学問的態度，すなわち「エジプトの個性」の描写を通じた「民族の自己批判」というべき態度と密接に関係していることは，ある程度読み取れるように思う。もとより本稿では，この知的巨人の全体像の，その素描さえ描くことなどできないが，彼自身の「個性」と彼が描きだした「エジプトの個性」との間に一定の結びつきがあることを示すことができればと考えている。そうした議論の導入部として，まず限られた資料から，彼の個人史をたどってみよう。以下の記述は，前出のゴネイミーの著作と，そしてヒムダーンの弟，アブデルハミード（‘Abd al-Ḥamīd Ṣāliḥ Ḥamdān）による評伝『エジプトの個性

の持ち主』[23]に基づくものである。

3．ヒムダーンの個人史

ガマール・ヒムダーン（正確には，Jamāl Maḥmūd Ṣāliḥ Ḥamdān）は，1928年2月28日，カイロの近郊カリユービーヤ県のナーイ（nā'i）村で生まれた[24]。ヒムダーン家は，ナイル・デルタに定住したアラブの部族（ジャッザーム〈Jadhdhām〉）の流れをくむ一族であったが，祖父の代には典型的な農家であり，ヒムダーンの父マフムードがカイロのアズハル学院に入学できたのは，その才能を認めた村の［コーラン学校の］（以下［　］内は筆者が補った語句）シャイフの強い勧めによるものだった[25]。父は，法律家を目指していたが，1919年革命時のデモに参加した件で退学処分を受け，師範学校への入学を余儀なくされ，結局，同校を卒業後アラビア語の教師となった[26]。ヒムダーンは，男5人，女2人の兄弟の次男であり，長兄は作家，3人の弟は，それぞれソルボンヌ大学のイスラム史教授，軍の中将，実業家といずれも世俗的には成功を収めた[27]。

ヒムダーンの教育は，他の兄弟と同様，学齢以前からアズハル知識人である父親によって開始された。この教育は，彼のアラビア語の「言語的創造力」を大いに養った。と同時に，ゴネイミーによれば，父親であるシャイフは，並のシャイフの子供のレベルを越えた人格的成熟をヒムダーンに与え，その後の孤独の留学や30年に及ぶ隠遁の学究生活に耐える素地を形作った。また，9人家族の家庭環境は，革命以前の大家族がそうだったように，彼を感受性が強く慈愛に溢れ信仰心の篤い人物に育て上げた[28]。

ヒムダーンは，彼の父が勤務するショブラ小学校に入学し，1939年にやがてわずか11歳で小学校卒業免状を取得して，名門の旧制中学タウフィーキーヤ校に進学する。そして1944年に卒業検定(tawjīhīya)試験を受けて旧制中学卒業免状を取得する。この時の成績の順位は，全国第6位であったという。同校での同期の卒業生には，シューラー議会議長のスブヒー・アブドル・ハ

キーム（Ṣubḥ ī ʻAbd al-Ḥakīm）や人民議会議長の故リファアト・マフグーブ（Rifʻat Maḥjūb）がいた[29]。

こうして彼は，1944年に16歳でカイロ大学文学部地理学科に入学する。彼が地理学を選んだのは，画才に恵まれ地図の作成を得意としていたことに加え，タウフィーキーヤ校の地理の教師に傾倒していたからだともいわれる[30]。大学生時代の彼は，ゴネイミーによれば，「他の学生のような情緒的関係をもつことなく」学業に没頭し，地理学科の図書室で書物を漁る学生生活を送った。また彼は，学友たちとパーティーを開いたり旅行をしたりする社交的な学生でもあり，同学科の友人と壁新聞を作って論文を発表したりした。当時のことを振り返って，ヒムダーンは親しい生徒に対し「エジプトの地理学は，スレイマーンに始まって，ヒムダーンに終わる」と述べたものだという[31]。ここでいうスレイマーンとは，当時の地理学科主任教授のスレイマーン・フザッイン（Sulaymān Ḥuzayyn）であり，同じく歴史学のシャフィーク・ゴルバール（Shafīq Ghurbāl）をはじめ，当時のカイロ大文学部にはそれぞれの分野の学問の創始者ともいえる錚々たる顔触れの教授が揃っていた[32]。

ヒムダーンは，1948年にカイロ大を卒業すると同時に，その抜群の学業成績を認められて文学部の助手に採用され，同時に推薦を受けてイギリスのレディング（Reading）大学に留学する[33]。そしてこの5年間の留学生活を終え，博士号を取得し，1953年に帰国する。博士論文のテーマは，「中部ナイル・デルタの人口」であった。そしてヒムダーンは，帰国と同時にカイロ大学文学部地理学科の専任講師に採用された後，1958年に助教授に昇進する。しかし，それからわずか5年後の1963年に突如として大学を辞める。

ヒムダーンがなぜ大学を辞めたのかについては，いくつかの説明がなされているようであるが，明確なことは不明である。例えば，彼の死後にある大学教授が紹介した説によれば，辞職のきっかけは教授への昇任文書に対する不満だという。すなわち，同時に昇進した別の教官が助教授への昇任時期がヒムダーンより遅いのに名前が先に書かれていたという瑣末な理由で彼が立腹したのが原因だとする。当時の文学部長は，辞職を願い出たヒムダーンを

慰留して，病休扱いにして事態を収拾しようとしたが彼に拒否されたとのことである[34]。

しかし，ゴネイミーが批判するように，ヒムダーンの辞職の背景には，当時の政治状況が大きな影を落としており，彼が大学社会に絶望するに至る経緯も複雑なものがあった。「彼がカイロ大学を辞めたのは，暴力でも脅迫でもなく自発的なものだった」，「彼は理性の限界を越える問題に直面し，その場所にいると進路を阻まれる思いがしたからだ」，あるいは「思想的テロリズムが彼を大学から追い出したのだ」などともゴネイミーは，述べている[35]。すなわち，ヒムダーンが辞職に至る1961年から63年は，政治体制の「社会主義的改造」がなされた時期であり，そうした変化の一環として，「大学に対する体制の締めつけが強化された」。例えば，カイロ大学の歴史上はじめて事務総長が大学の外部から登用され，しかも彼らはいずれも軍人出身という状況だった。また，この1963年には内務大臣配下の「秘密機関」が学内に入り，大学の教官たちは，アラブ社会主義連合やその青年組織に加盟して権力に接近して，同僚を見張る目付になるか，それとも沈黙して真実を語ることを止めるかのいずれかに両極分解した。このとき，こうした政治的理由でヒムダーンのほかにも当時の文学部長を含め3人の教授がカイロ大学を離れている[36]。

さて，ヒムダーンの弟アブデルハミードは，兄と当時のナセル体制との関係を次のように叙述している。「兄は，祖国を揺り動かしている政治的社会的文化的な無秩序がもたらす影響に気がついた。彼にとって，革命に基礎をおく政治体制は，その本質において軍事機関の完全なる覇権を伴う権力の極度の集中（markazīya）以外の何物でもないようにみえた。そして，そこ［権力の集中］においては，シッラ（shilal：閉鎖的な派閥集団）による支配と真の民主的権利の保障の後退を伴う形で，個人的関係（信頼集団〈ahl al-thiqa〉）と政治的関係が混在する現象が見られた」[37]。こうした状況に直面したヒムダーンがその信条にしたがって正直に取った態度は，当局の不興を買うものであった。彼は，教壇で政府のスーダン独立問題に対する政策を公然と批判

し，政府が組織していた「イスラーム会議」(al-Mu'tamar al-Islāmī) の顧問就任の要請を断った[38]。そして，アブデルハミードの表現によれば，政府の要人の「『誰それ』と関係をもつ恐竜たち (al-dināṣūrāt)」が彼の兄の講義を中止にし，通常助手が1年生に教える地図制作の授業を割り振るなどの嫌がらせをし，最後にはハルツームのカイロ大分校に一時彼を追いやる措置まで取った[39]。兄ヒムダーンは，こうした「恐竜たち」に対抗する唯一の武器は学問だと考え，イギリスに再度留学しようと試みるが，それが実現不可能と知ると，ついに大学を離れる決意をしたのである，と[40]。

そして，この「恐竜たち」に対して，ゴネイミーも「こうした無知を振りまく機会主義者や腐敗分子こそがヒムダーン辞職の原因だったのだ」という別の教授の発言を紹介するとともに，彼自身も「学問的にはるかに及ばないこれらの輩が加えた虐待(ẓulm)に対し，ヒムダーンは自身を犠牲にすることで復讐 (tha'r) を行なったのだ」と述べて，当時の大学社会の状況に対し批判を加えている[41]。彼の辞職の決断は，この社会の汚濁 ('uyūb) に満ちた上部機関の決定に盲従する原則主義者に対する彼の批判的態度の一つの結果であった[42]。

ところでゴネイミーは，ヒムダーン自身の性格を描写する箇所で，学生時代の学友たちの「付和雷同や馴合いやもたれ合い」(al-tawā'um aw al-talā'um aw al-talāḥum) からほど遠い人格だったと述べている[43]。彼の潔癖で狷介な個性 (性格) にとっては，こうした「恐竜たち」が構成するエジプト社会の醜悪な側面，後で紹介するところの「エジプト的性格」の一側面が受け入れがたく感じられたのであろう。ヒムダーンを「隠遁」に導いたのは，大学という狭い社会に集約的な形で表れた，この権力と民衆の間で培われたエジプト社会の醜悪な側面であったと言えるのではないかと思う。そして，こうした「エジプトの個性」に対する倫理的関心こそ，次項で述べる膨大な著作を生みだしてゆく基盤となったのではないかと推測されるのである。

ゴネイミーは，「ヒムダーンが大学を離れ，その腐った社会から隠遁して学問に専念しようとした決断それ自体は，エジプトにとって，その民衆および

学者や知識人にとって良いことだった」と述べている[44]。その辞職によって「彼は祖国の各地にいる数千の学者や研究者に一つの範を示したのだ」[45]。上記の「エジプトの個性」と「ヒムダーンの個性」の間の相剋をめぐる仮説から考えれば，彼のこうした評価はよく理解されるのではないかと思う。

4．ヒムダーンの著作とその評価

ヒムダーンの主要な著作のリストは，前出の『アル・カーヒラ』誌特集号，ゴネイミーやアブデルハミードの評伝などに収録されている。ここでは，アラビア語の単著についてのみ年次順に挙げておくことにする(煩瑣でもあるのでアラビア語原書名は省略する)。

1958年：『アラブ世界に関する諸研究』，『エジプトの人口成長と人口分布』，『環境の諸形態』(第2版1978年)，1961年：『都市地理学』(第2版1971年，第3版1978年)，1963年：『アラブ都市』，『アラブ世界における植民地主義と解放』，1964年：『アラブの石油—人文地理学的研究』，1966年：『新しいアフリカ—政治地理学的研究』，1967年：『エジプトの個性』(第2版1970年，改訂版1980，81，84年)，『人類学的にみたユダヤ人』，1968年：『植民地主義の戦略と解放』(第2版1982年)，1971年：『現代イスラーム世界』，1972年：『ヨーロッパとアジア—地理的境界線をめぐる研究』，1973年：『リビア・アラブ共和国—政治地理学に関する研究』，1974年：『世界戦略における10月6日』，1975年：『スエズ運河—エジプトの鼓動』，1984年：『エジプト農業地図』，1993年：『カイロ』。また，発行予定の本として，『ユダヤ教とシオニズムとイスラエル国家』，『イスラーム地理学』，『地理学—その本質』があるという。

これらの膨大な著作のなかでヒムダーンの代表作と言えるのは，もちろん1967年に初版が出された『エジプトの個性』である。この本が発表されるまで学界を除いて彼はほとんど無名に近い存在だった[46]。第3次中東戦争の敗北で虚脱状態に陥っていたエジプトの言論界の「悲しみの夏」に出されたこの本は，当時の知識人に衝撃的な影響を与えた。しかし，上記の著作リスト

が示すように，ヒムダーンの研究は，「エジプトの個性」以外の広範な主題を扱っている。もちろん，それらは主要著作の『エジプトの個性』のなかにも要約された成果として反映しているが，しかしこうした多様な研究主題は，彼自身の研究構想のなかで一定の秩序をもって配分されていたとみることができる。この点についても，ここでは十分に紹介できないが，数々の解釈，すなわちヒムダーンの研究史と著作群をめぐって多様な解釈が特に彼の死後行なわれているようである。

例えば，『アル・カーヒラ』誌に寄稿したオマル・ファールーク（'Umar al-Fārūq）は，その論稿を『ヒムダーンの三層性』（1995年）という著作に発展させているが[47]，そのなかでヒムダーンの研究を次の三層構造，すなわち「三層性」（thalāthīya）によって把握しようとしている。それは，(1)エジプトの個性，(2)アラブ世界の諸研究，(3)現代イスラーム世界の地理学という三つのレベルである。これに関連して，前述の箇所でシュクリーがヒムダーンを「我らの時代」の同世代と捉え，1952年革命以前の世代と対比している議論がここで想起される。シュクリーは，次のように述べる。今世紀初頭のナフダ（思想的覚醒）運動の影響を受けた「1919年革命の子供たち」である古い世代（ここには前掲のフザッインやゴルバールなどのヒムダーンの先生たちが属する）は，エジプト民族主義の起源の追求，そしてその民族的遺産と近代西欧文明の調和の考察に終始した。これに対して「我らの時代」のナフダは，「エジプト民族主義とアラブ民族主義，アラブ民族主義とイスラーム，そしてイスラームと現代世界の間の矛盾を克服する」あるいは，「エジプトと，そのアラブ性（'urūba）やそのイスラーム，世界に拡がる人間主義的時代，それら相互の関係を考える」試みとして，全く異なる次元で展開している[48]。これは，ファールークによる「ヒムダーンの三層性」論の有効性を示す議論であるように思う。

そのほか，ヒムダーンの著作については，論者それぞれの読み方がなされているようであり，ここでそれらを整理することはできない。例えば，『アル・カーヒラ』誌に寄稿した論文のなかで，ムハンマド・ウスフール（Muḥammad

'Uṣfūr)は，ヒムダーンには三つの主要な研究課題があり，それは(1)エジプトの個性，(2)イスラームと国際政治，(3)帝国主義の戦略と解放であると述べている[49]。また同誌で，ファトヒー・ムサイラヒー（Fatḥī Muṣaylaḥī）は，ヒムダーンの研究史を次の3段階に区分している。(1)科学的探究の段階（1953～64年），(2)指導された［エジプト］民族主義的（waṭanī）探究の段階（61～84年），(3)［アラブ］民族主義的（qawmī）探究の段階（84～93年）[50]。このヒムダーンの追悼特集に寄稿したこれら15人の文化人の彼の仕事に対する評価は，帝国主義論，政治地理学の考察，歴史学と地理学の関係をめぐる方法論的議論，宗派紛争を憂えヒムダーンの国民統合論への貢献に賛辞を送るものなど多様である。

本稿で試みるのは，彼の壮大な体系のごく限られた一部を，しかも「はじめに」で述べたように，中央集権性と同質性をめぐる議論に限定して行なう序論的な考察である。しかし，彼の地理学の方法論に立つ「エジプトの個性」に関する思想的哲学的考察が，上記の部分で暗示的にしか言及できなかった彼自身の「隠遁」知識人としての個人史を背景にもつものであることだけは，今一度注意を喚起しておきたいと思う。

第2節　『エジプトの個性』の構成内容

1．「地域的個性」をめぐって

本書の章別構成と内容の概略を説明する前に，本書の主題である「エジプトの個性」（shakhṣīya miṣr）という用語，および「地域的個性」（shakhṣīya iqlīmīya）一般の概念をめぐるヒムダーンの見解を紹介しておこう。

さて，1920年代以来，今日までエジプトの知識人の関心を強く引きつづけてきた議論に，「エジプト的性格」（al-shakhṣīya al-miṣrīya）をめぐる論争がある[51]。本書がこの「性格」論争が織りなす歴史の流れのなかで傑出した位

置を占めていることは言うまでもない。したがって，本書を『エジプトの性格』と翻訳することも可能であったが，本稿では，shakhṣīyaという用語に従来使われてきた「性格」という言葉の代わりに「個性」という訳語を当てることとし，『エジプトの個性』と訳出した。その理由は，すでに別稿で述べたとおり(52)，1980年の改訂版において，ヒムダーンが「民族的性格」論，あるいは「国民性」論を批判し，本書がそれと全く内容を異にする点を強調したことに配慮したためである。ヒムダーンによると，本書は「エジプトという国あるいは地域の個性に関する研究であって，エジプト人あるいはエジプト的人間の個性に関する研究ではない」。「なぜなら，地理学とは『事物に関する科学』であり『人間に関する科学』ではないからである」（I -p. 32；第1巻32ページの略，以下同じ）。「むしろこのような『民族的特質』(al-ṭawābi‘ al-qawmīya) に関する研究は，イスラエル人やシオニストの『研究者』が行なったエジプト人やアラブ人に関する著作にみられる」（I -p. 33)。それゆえ，本稿で「個性」という訳語を用いる一つの理由は，ヒムダーンが嫌悪したであろう，悪意と偏見に満ちた「民族的性格」論との混同を避けるためである。

さて，彼が考察する「エジプトの個性」とは地理学の方法論に基づく一つの「個性」(shakhṣīya)，すなわち「地域的個性」であった。以下に述べるようなヒムダーンの方法論的議論から考えても，shakhṣīya（英語で言えば，“character”ではなく“personality”である）を「個性」と翻訳することが妥当ではないかと思う。ヒムダーンは，地域的個性について，第1巻の冒頭部分で次のように述べる。

「地域的差異を探究する科学である地理学にとって，その核心は『地域的個性』(shakhṣīyāt al-aqālīm: regional personality) の認識にある。ここでいう地域的個性とは，単なる数字の寄せ集めや地域の体形 (jism) を越えたものである。それは，ある地域を特徴づけるものは何かという問いを発し，『場所の精神』(rūḥ al-makān，あるいは『地霊』) に接近し，隠れた個性を規定している『固有の天性』(‘abqārīya al-dhātīya) を究明する試みである。すなわち，ここでいう『場所の精神』とは，いわゆる『場所の天性』(‘abqārīya al-

makān: genius loci, 『気風』）のことにほかならない」（Ⅰ-p. 11)。

また，ヒムダーンは，この長大な研究を通じて，「地域的個性」を分析する際に一貫して用いる基本的な二つの概念枠組みである，「立地」（al-mawdi': site）と「位置」（al-mawqi': situation）について，冒頭の序論部で次のように解説している。

「一般論として，地域的個性は，その基本的な二つの側面の相互作用によって説明できる。その2側面とは，『立地』と『位置』である。立地とは，それ自身固有の特徴・規模・資源をもった環境を意味し，例えば氾濫河川の環境とか河谷の形状などがそれに当たる。これに対し，位置とは，ある地域と土地，人口，生産の分布との相関によって規定され，また地域と結びついた場所の諸関係によって規制された相対的な特徴である。立地が，触れることのできる内部的土着的な特殊性をもつのに対し，位置とは，直接見ることのできない幾何学的な（handasīya）思想である」（Ⅰ-p. 35)。

そして，「この中核的な二つの要素と両者の間の変わりゆく関係によってエジプトの個性を説明することができる。例えば，両者は次のように異なることがある。[エジプトがもつ]『立地』の規模は，世界の隅石を占めるその『位置』をいつも十分に満足させてきたわけではない。また，前者がある程度の孤立に耐えることができるのに対して，後者は[外部世界との]接触を強く望むという対照性がある。そして，両者が結びついてこそ，はじめてそこに政治的統一と，そして暴力的な中央集権性が発生するのだ。両者を繋ぐ手綱は，すべてが内生的なものではなく，対外的な諸要因とも結びついているのである」（Ⅰ-pp. 35-36)。

この立地と位置の関係によって，歴史的段階それぞれの地域的個性が生みだされてくるという考え方は，ある地域に固有の個性が，すなわちその地域の立地の有り様に基づいて特殊な個性が生みだされると議論を単純化する傾向に対する批判を含んでいる。この態度は，改訂版においてよりはっきりと表れており，例えば，ヒムダーンは，次のように従来の議論に対して警告を発している。

エジプトの個性に関して，これまで多くの特徴づけがなされてきた。例えば，“land of paradox”とか“land of anomalies”といった議論である。これらは，表面的とはいわないまでも，極めて適用の範囲が限定された特徴づけにすぎない。また，よくいわれる「専制の大地」(arḍ al-ṭughyān: land of tyranny) という表現も同様である。エジプトの個性の特徴としてファラオ的専制を強調する考え方は，奇形に近い単純化を招く恐れがある。「こうした特徴づけのそれぞれは，実は別の諸地域に対しても十分に適用できる。むしろ，ある地域の個性がもつ固有性とは，こうした諸特徴の集合全体の働きかけによって生みだされると考えるべきである」(I-p. 34)。

以上のように，ヒムダーンは，「国民性」論や後述のような「ファラオ的専制」をめぐる議論の極端な単純化を批判しているが，これは初版と比較した場合の改訂版にみられる重要な差異の一つであるように思う。もとより本稿では，その他多くの箇所について初版と改定版の完全な比較を行なうことはできないが，次項では章別構成の変化と本書の主要な問題群を示すことによって，本稿が取り上げる中央集権性というテーマのヒムダーンの研究全体における位置づけについて若干の議論を試みてみたい。

2．初版と改訂版

ガマール・ヒムダーンの『エジプトの個性』は，1967年に初版が出された後，70年に再版が出された。その後，大幅に書き改められ，1980年と81年，84年に4分冊の形で，合計ページ数3552に及ぶ改訂版が出された。初版とこの改訂版を比べてみると，単なる量の増大や説明の精緻化に加えて，構成内容に若干の変化があった。まず，初版と改訂版の目次を，以下にあげておく。

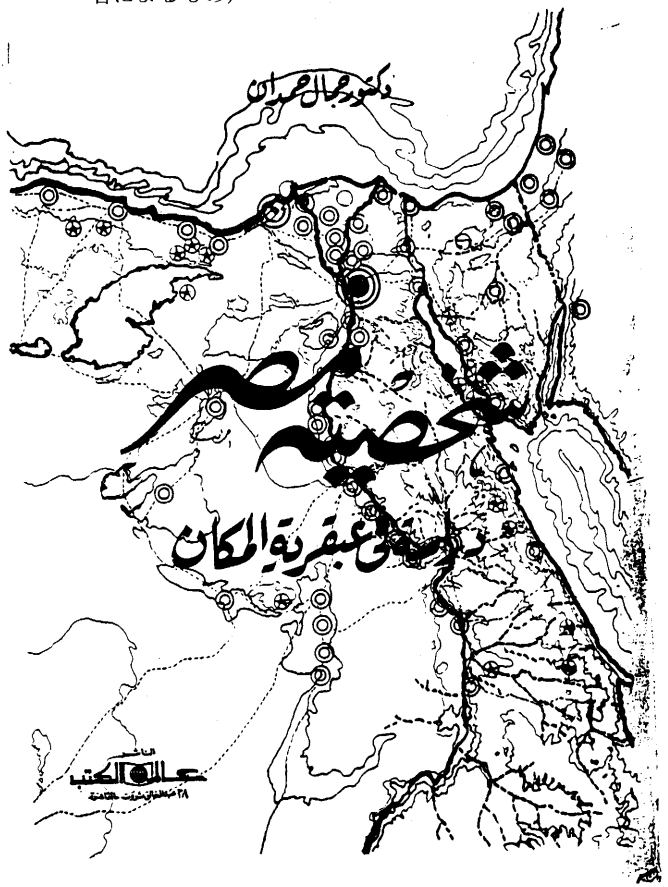
初版の章別構成は以下のとおりである。

序論　地域的個性について

第1章　自然の同質性に基づく同質性と統一性

第2章　封建的専制から社会主義革命へ

図1　『エジプトの個性』（改訂版）第1巻表紙（題字も地図も著者によるもの）



第3章　拡張しかし集中性

第4章　帝国主義国から植民地へ—立地と位置の間

第5章　文明的先進国から後進国へ

第6章　文明の構造と自然的基礎

第7章　局面の多様性

第8章　継続性と断絶—ファラオ主義かアラブ主義か

第9章　エジプト民族主義（ワタニーヤ）とアラブ民族主義（カウミーヤ）

次に改訂版の各分冊の目次をあげる。

第1分冊

序論　地域的個性について

第1巻　エジプトの自然的個性

第1部　地学から地理学へ　1．エジプトの大地　2．河川の生命史　3．ナイル川の歴史的変遷　4．エジプトの相貌

第2部　沙漠　5．西部沙漠　6．西部沙漠の諸地方　7．西部沙漠の諸地方（続）　8．東部沙漠　9．東部沙漠の諸地方　10．シナイ

第3部　ナイル河谷　11．河川の自然地理学　12．河谷の形態学　13．河谷とファイユーム　14．デルタ

第2分冊

第2巻　エジプトの人間的個性

第4部　同質性　15．自然の同質性　16．物質的同質性　17．居住の同質性　18．聚落の同質性　19．人間の同質性

第5部　地理的固定性と歴史的変動性　20．文明的先進国から後進国へ　21．政治的統一性　22．ファラオ的専制から社会主義革命へ

第6部　エジプトの政治的個性　23．帝国主義国から植民地へ　24．近代ヨーロッパ植民地主義　25．エジプトの戦略的個性

第7部　文明の構造と自然的基礎　26．世界の心臓：エジプトの地理的位置　27．ナイルの賜物　28．ナイルの統御

第3分冊

第3巻　エジプトの統合的個性

第8部　エジプトの経済的個性　29．エジプトの経済地図　30．エジプト農業，計画から計画化へ　31．垂直的拡大から　32．水平的拡大へ　33．工業的エジプト　34．エジプトの諸工業：基幹的な農産物加工業　35．エジプトの製造業：化学工業から金

属工業へ　36．鉱産物資源と金属工業

第4分冊

第9部　エジプト社会の地図　37．移住なき過密　38．エジプトの人口：問題と解決の間　39．拡大しかし集中性：エジプト，すなわちカイロ

第10部　時間の地平と空間の局面　40．局面の多様性　41．中間と均衡　42．継続性と断絶

第11部　エジプトとアラブ　43．エジプト民族主義とアラブ民族主義の間

以上から，「序論」を除けば，初版が全9章から成っているのに対し，4分冊の改訂版は，全3巻，全11部，全43章という壮大な構成に編成替えされている。「序論」を除く両者の章別構成の異同について概略を述べれば，以下のとおりとなろう。

改訂版は，第1巻「エジプトの自然的個性」(第1分冊)，第2巻「エジプトの人間的個性」(第2分冊)，第3巻「エジプトの統合的個性」(第3・4分冊)という三部構成をとるが，このうち初版と比べほとんど全部といってよいほどに大幅に書き加えられたのは，第1分冊＝第1巻と，第3分冊＝第3巻第8部「エジプトの経済的個性」および第4分冊のなかの第9部「エジプト社会の地図」の第37・38章の部分である。その他の章別構成は，初版の各章が若干の配列の変更を伴いながら加筆され，改訂版の各部各章に発展している。相互のおおまかな対応を示せば以下のとおりである（以下，初版の各章名→改訂版の各部名の順で対応関係を示す)。

初版第1章→改訂版第4部，第2章→第5部第21・22章，第3章→第9部，第4章→第6部，第5章→第5部第20章，第6章→第7部，第7章→第10部第40・41章，第8章→第10部第42章，第9章→第11部。

さて，前掲の箇所では「若干の配列の変更」と述べたが，実は本稿で取り上げる中央集権性(あるいは集中性，markazīya)をめぐる問題との関係でいうならば，論理配列上「若干」ではすまない変更も含んでいる。すなわちそれ

は，初版第3章「拡張しかし集中性」および第5章「文明的先進国から後進国へ」の位置の問題である。前者は，改訂版では第3巻の第9部第39章という後半の部分に移され，また後者は，初版の第1章と第2章の間に該当する第5部第20章という前の方に配置換えされた。前者の場合，第3巻は，それまでの「自然的個性」と「人間的個性」の叙述を受けて，経済・社会（人口）・歴史・民族主義などの側面からエジプトの「統合的個性」が語られる部分であり，前述のように新たに加筆された第37・38章と合わせて，人口分布の社会的問題を論ずるために同章がここに配置変えされたのであろう。

しかし，本稿が関心をもつ中央集権性（集中性）と同質性との相関関係を明らかにするためには，ヒムダーン自身が述べている「同質性（tajānus）→統一（waḥda）→中央集権性（markazīya）」という議論の順序の方が望ましいように思う。そして，初版の方が改訂版よりも，上記の順序により近い章別構成を取っていたと考えられる（ただし，この初版も論理配列からみれば不十分な点があるように思う）。

したがって次節以降では，この「同質性→統一→中央集権性」という配列にしたがって，ヒムダーンの叙述内容の構成を整理し直し，読者に提示したいと思う。しかし，繰り返し述べてきたように，本稿で紹介できる内容は，ヒムダーンの壮大な体系における重要ではあるが，ほんの一部を占めるものにすぎない。多岐にわたる論点を網羅し，「地理学と歴史学の融合」を目指したヒムダーンの壮大な体系は，上記の論理配列を超えた独自の叙述形式を必要とした，というべきなのかもしれない。ただし，ヒムダーン自身が構想した地理学の体系と方法論について，彼の「序論」の概説を行なうことは，専門知識の欠如した筆者の手に余るものである。ここでは，ヒムダーン自身が語る『エジプトの個性』のプラン（khiṭṭa）を紹介し，そのなかで彼の抱いた地理学の構想の断片に触れることにしたい。ヒムダーンによれば，この本が扱う主要な主題，「エジプトの個性」を特徴づける問題群は，以下のとおりである（Ⅰ-p. 37以降）。

(1)自然的・物質的・居住的・人類的同質性，(2)自然的・政治的統一性，(3)

文明的先進国から後進国へ，(4)帝国主義国から植民地へ，(5)ファラオ的専制から社会主義革命へ，(6)文明の構造と自然的基礎，(7)拡張しかし集中性，(8)移住なき過密，(9)局面の多様性，(10)中間と均衡，(11)継続性と断絶，(12)民族主義の二重性（ワタニーヤとカウミーヤ）（Ⅰ-p. 47)。

以上は，改訂版の章別構成とほぼ対応している。「地理学は，総合科学であり，自然科学と社会科学の間にかかる『橋』だ」（Ⅰ-p. 14）と考え，また「通常の地域的地理学は，場所の描写にすぎないが，地域的個性とは場所の哲学である。前者が報告的（taqrīrī）地理学なら，後者は超越的地理学（super-geography, transcendental geography）である」（Ⅰ-p. 17）とも語るヒムダーンにとって，たしかにこれらの主題の配列は，「伝統的な」自然・人文地理学という叙述の形式に従ったものではない。

たしかに，第1巻こそ「地理学のABCの順序」として「自然的個性」を扱う。それは，地形学の一般的叙述で始まり，ナイル河谷と沙漠というエジプトの風土を構成する2側面を解説し，さらに各地方の詳細な叙述へと展開してゆく（Ⅰ-pp. 47-49)。そして，これを起点として，エジプトの諸地域からエジプトという地域，あるいはアラブの古典地理学の用語によれば，エジプトの諸地方（kurāt miṣr）からエジプトという地方（kura miṣr）へと総合化してゆく作業が始まる。再びアラブの古典地理学の言葉を借りれば，第1巻は，ひたすら収集と描写と叙述を行なう「諸国の地誌」（taqwīm al-buldān）であるのに対し，第2巻以降は，秤量と同定と評定を意味する「諸国の計測」（taqyīm al-buldān）に該当する（Ⅰ-pp. 47-49)。

後者のエジプトの国土（ワタン）全体の特徴を把握する作業は，様々な側面をもつ「同質性」の考察が導入部となる。それらの諸側面とは，土地と気候の「自然の」同質性，農業と作物の「物質的」同質性，人口分布が示す「居住の」（'umrānī）同質性，農村と都市の「聚落の」（ḥaḍarī）同質性，系譜と人種構成における「人間の」（basharī）同質性である。「我々は，この同質性から論理的に統一性へと進む」。それは，地域的，民族的，言語的，心理的，等々を統括する政治的統一性である（Ⅰ-p. 49)。

それに続いて，「……から……へ」の連なりからなる歴史的発展の叙述が展開する。すなわち，「文明的先進国から後進国へ」[「政治的統一」の前に位置していて，ここでの説明と一致しないように思うが]，「ファラオ的専制から社会主義へ」，「帝国主義国から植民地へ」と続く。この最後のテーマは，帝国主義の最後のそして最高の段階である近代ヨーロッパ帝国主義とエジプトの戦略的個性に関する二つの章を導く。以上の政治と戦略の分野（「政治的個性」）から，この第2巻の結論である「文明の構造とその自然的基礎」の議論に入ってゆく。それは，「世界の心臓」とも形容されるエジプトの「位置」（マウキウ）と，「ナイルの賜物」というその「立地」（マウディウ）の二つの側面によって総合的に説明される（Ⅰ-pp. 49-50）。

そして「この磐石な基礎の上に，我々は自動的にエジプトの経済的個性の考察に道を進め」，そして経済から「論理的に」社会へと議論を展開してゆく，とヒムダーンは述べる。その社会に関する議論では，第1に「移住なき過密」というタイトルで人口問題を論じ，第2に「拡張しかし集中性」の章で都市問題を扱う。これが，「経済的個性」と「社会の地図」を論じた第3巻の前半であり，「自由と迅速をもって」，「時間の地平と空間の局面」（第10部）によって，これまでの議論を総括し，アラブとエジプトの関係をめぐる最終部に達する（Ⅰ-p. 50）。

上述の箇所で問題提起したように，次節以降では，これらの問題群のなかから「同質性」，「政治的統一」，そして「中央集権性」と「ファラオ的専制」のテーマを取り上げ，相互の配列に着目しながら，ヒムダーンの叙述内容の構成を整理しなおし，読者に提示したいと思う。そこでテキストとするのは，改訂版の内容であり，したがって上記の各問題群が該当する以下の各部各章である。すなわち，次の第3節では，第2巻第4部「同質性」第15～19章を，また第4節では，同第5部「地理的固定性と歴史的変動性」のうち第21章「政治的統一性」と第22章「ファラオ的専制から社会主義革命へ」，そして第3巻第9部「エジプト社会の地図」のうち第39章「拡大しかし集中性―カイロ・

エジプト」をテキストとして分析する。

第3節　同質性

同質性(tajānus)は，ヒムダーンがエジプトの個性を構成する基本的要素として筆頭にあげている特徴である。前節でみたように，この同質性は，エジプトという個性の統一性を生みだす基盤であり，またその他の特徴を説明するための前提であった。ヒムダーンは同質性を次の五つの側面から説明する。それは，(1)自然（ṭabī'ī），(2)物質（mādī），(3)居住（'umrānī），(4)聚落（ḥaḍārī），(5)人間（basharī）である。この配列は，(1)自然に見られる同質性に始まり，続いて(2)自然を基礎とした生産活動を述べ，その後で(3)この自然の上に被される人間の覆い，すなわち人口の地域的分布を，そして(4)彼らが居住する農村と都市の聚落の様式を，最後に(5)彼ら人間そのものの人種的構成を論述してゆく。本節では，同質性が政治的統一性，さらに中央集権性とどのように関連してゆくかという問題意識に立ちながら，特にナイル川に関する記述に注目してそれぞれの章節の内容を紹介する。ここで扱う箇所は，第2巻第4部「同質性」の第15章から第19章までであるが，各章の細目次をそれぞれ最初に掲げ，その後でそれぞれの内容を紹介してゆくことにしたい。

1．自然の同質性

第15章「自然の同質性」（II-pp. 13-58）の細目次は，以下のとおりである。

第15章　自然の同質性
　　(1)自然地理学について　　(2)自然の統一性
　1．エジプトの気候　　(1)移動性的，大陸的，安定的気候　　(2)温度計に

ついて　(3)気候の戦略性　a．夏　b．冬　(4)気温の周期　a．夏　b．冬　(5)降雨図　a．基本的特徴　b．地理的分布　c．エジプトの気候区

ヒムダーンによれば，自然の同質性（al-tajānus al-ṭabī'ī）は，エジプト的環境の核心的特徴である。ここでいうエジプト的環境とは，河谷全体が氾濫の単位となっていることである。この単一の河谷を形成する河川が地形を決定する基本原則であり，それゆえナイル川こそがエジプトの大地に同質性を付与するのである。エジプトの自然は，たしかにこの河谷に対する沙漠の存在という明白な対照性を有するが（これに比べればデルタと上エジプトの相違は二次的なものにすぎない），だからといってこの国の自然は，「二音律」（zweiklang）の構造をもつわけではない。「生活の場としてのエジプト」（miṣr al-ma'mūra）を考えるならば，完全な意味で環境の単一性という特徴をもつ「一音律」（einklang: naghma wāḥida）の国である（以上，II-pp. 13-14）。その場合，同質性あるいは同質化（tajnīs）とは，河川の形成そのものの中に，すなわちその沖積過程に起因する。そこで作用する法則は，自然的機械的な緩慢な「勾配」（tadarruj: graduation）である。同質性が，エジプトの環境を形成する第1の基本法則なら，この勾配はそれを補完する第2の法則である（II-p. 14）。

ただし，この章の記述は細目次にみるように，その大半が「気候の同質性」をめぐる議論に当てられる。ナイルが地形的な同質性をエジプトに与えた過程については，第1巻の「エジプトの自然の個性」において叙述がなされているためであろう。ヒムダーンは，エジプトの気候について，気候区の二重性，すなわち地中海性気候と沙漠性気候の二重性を認めるが，前者はわずかな海岸部を占めるにすぎないのに対し，後者はエジプトという身体そのものであると述べ，気候の同質性を結論づけている（II-p. 58）。

2．物質的同質性

第16章「物質的同質性」（II-pp. 59-165）の細目次は以下のとおりである。

第16章　物質的同質性

1．エジプト農業の農業地図

2．生態学的条件　(1)土壌　(2)灌漑　(3)気温　(4)人口　(5)都市

3．エジプト農業の構造　(1)作物ピラミッド　(2)農作物の分布と集中　(3)同質性の基準　a．集約度　b．集中度　c．作物曲線　d．累積率

4．同質性の基礎　(1)農業の集約性　(2)作物の動態性　a．新作物　b．普及と縮小　c．作物の移動　(3)作物の分布　a．複合的特徴　b．作物のプロフィール

5．エジプトの農業地域区分　(1)農業分類の基準　a．基底的四要素性　b．地方的作物　c．果実　d．各種作物

6．県別の農業的個性：発展の類型学　(1)極端な都市型の農業様式　a．アレキサンドリア　b．イスマイリーヤとスエズ　(2)中心部都市型の農業様式　a．ギーザ　b．カリユービーヤ　c．ブヘイラ　(3)標準的発展型様式　a．ムヌーフィーヤとファイユーム　b．ダミエッタ　c．ダカハリーヤとカフル・シェイフ　d．シャルキーヤとガルビーヤ　(4)標準的伝統型様式　a．ベニー・スエフ　b．ミニヤとアスユート　c．ソハーグ　(5)非標準的伝統型様式

7．地理学的農業地域区分　(1)デルタ北部　a．バラーリー・コンプレックス　b．地域のポケット　(2)デルタ中部　(3)デルタ南部　(4)首都の三角地区　(5)ファイユーム　(6)上エジプト北部　(7)上エジプト中部　(8)最南部

この章では，前章で述べた同質性をもつ自然に基礎をおいて人間が営む生産活動，すなわち農業生産にみられる同質性，物質的同質性（al-tajānus al-mādī）を検出する。ヒムダーンは，冒頭でまず，前章で分析した自然の同質性，特に気候の同質性が，農業生産に及ぼす影響を述べる。それから，第2節で，農業生産を規定する生態学的条件，すなわち「土壌」，「灌漑」，「気温」，「人口」，「都市」を次々に叙述してゆくが，注意したいのは，その「生態学的」条件のなかに，農産物の需要や農業労働力の分布といった人口密度や都市との近接性など人間的要因を含めている点である。これらの生態学的条件のなかで，本稿で関心を第1に引くのは，灌漑の要素である。

ヒムダーンによると，灌漑の同質性を基盤として成立するエジプト農業にみられる同質性は，ベイスン灌漑が行なわれた時期において最も顕著に観察された。しかし，たしかに近代以降，通年用水路灌漑の普及によって，多様化の傾向が強まったように一見考えられるが，近代的灌漑技術は，それまで用水に問題のあった地域にも灌漑の恩恵を及ぼすことによって，むしろ地域的差異を縮小させたのである。そして，この近代的灌漑技術に基づく農業生産の同質化の過程を完成したのが，アスワン・ハイダムの建設であった（II-pp. 62-63)。エジプト農業の同質性は，まさに雨を代替し，降雨図を塗り替える灌漑の働きによって作りだされたのである。その結果，河谷においてエジプトの地理学（jūghrāfīya)は，ほとんど水理学（hīdlūjīya）に接近したとさえいえる（II-p. 63)。

こうした農業生産の生態学的条件を前提にして，ヒムダーンは，エジプト農業の地域的構造を「作物ピラミッド」と表現する各作物の作付面積の地域分布によって詳細に分析してゆく。そして，(1)集中度（miqyās al-tarakkuz)，すなわち県別の作物別作付面積構成と，(2)集約度（miqyās al-takāthuf)，すなわち作物の作付面積の県別分布の双方から，次のようなエジプト農業の同質性を検出する。それは，ベルシーム（エジプト・クローバー)，小麦，トウモロコシ，綿花という4大作物の作付分布に同質性がみられるという結論である(II-p. 92)。これをヒムダーンは，「基底的な四要素性」

(al-rubāʻīya al-qāʻidīya)と呼んで，エジプトの農業地域区分の基準として用いる。この4大作物の作付面積の合計が県別の総作付面積に占める比率は，最低のアレキサンドリア県の40.4%から最高の上エジプト・ソハーグ県の89.4%までと偏差がある(1975年の農業統計を使用)。しかし，前者のような都市近郊農業地帯は，全体からみれば例外的な地域であり，「四要素性」こそがエジプト農業に同質性を付与しているのだと，ヒムダーンは主張する(II-pp. 119-120)。

こうした4大作物を基準にした同質性の検出への固執をみると，日本の読者には，稲作が日本文化に占める中心的位置をめぐる言説を思い浮かべるかもしれない。ここでヒムダーンは，作物分布にみられる質的な多様性を，作付面積の計算を通じて量的な差異の問題として解釈している。すなわち彼は，前述の「勾配」(tadarruj)の法則を適用することによって，同質性という言説を「創造」しているということもできる。

ヒムダーンは，こうしたエジプト農業の同質性の基礎として，二つの条件を指摘する。それは，(1)農業の集約性と，(2)作物の動態性である。まず，(1)「農業の集約性」は，土地利用率（耕地面積・作付面積比）によって表現できるが，この比率の県別の差異は，180～220%の範囲内に入っており，その結果，「エジプトの耕地は一つの畑」，同じ集約性をもつ畑だと表現される（II-pp. 105-107)。次の(2)「作物の動態性」とは，新作物の普及などの作物の作付の地域的移動のことである。例えば，トウモロコシのような新作物は，通常，デルタから上エジプトへと南進の動きを示すが，伝統的作物の場合も，レンズ豆のように近代以降，通年灌漑の普及に追われる形でやはり南進の動きをみせた(II-pp. 108-112)。こうした作物の移動は，農業の同質性を促進する役割を果たした。

上記の「基底的な四要素性」を基準として用いることによって，ヒムダーンは，本章の後半部で県別にみられる農業の個性と農業地域区分を叙述してゆく。そこでは，4大作物の作付比率に加えて，米と果樹のそれぞれの作付比率が計算され，例えば，「農業の発展様式」の場合，次のような五つの類型

が設定されている。①極端な都市型の農業様式(四要素性が低く，果樹の比率が高い)，②中心部都市型（都市型だが，①よりは四要素性が低くなく，果樹の比率も高くない)，③標準的発展型（都市型と農村型の中間，四要素性のうち自給的食料作物の比率が高く，北部に位置し米の比率も高い。果樹の比率はそれほど高くない)，④標準的伝統型（上エジプト北・中部，四要素性が75～90％と高い伝統的農業地区，その半分が小麦とトウモロコシの穀類であるが，それは人口比率が高いために基本的食料作物が中心となるからである。果樹の比率は低い)，⑤非標準的伝統型（最南部のケナーとアスワン，四要素性の柱のいくつか〈綿花とベルシーム〉が少なく，サトウキビなどそのほかの作物の比率が高い）（II-pp. 125-148)。

3．居住の同質性

第17章「居住の同質性」（II-pp. 166-211）の細目次は，以下のとおりである。

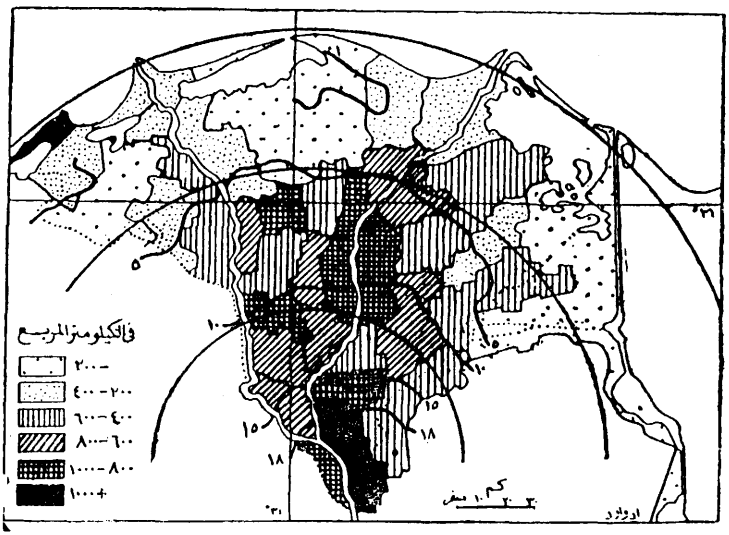
第17章　居住の同質性

1．人間の覆い　(1)同質性の度合い　(2)人口密度の水準　(3)人口密度の様式：上エジプト　a．南部　b．中部　c．北部　d．上エジプトのプロフィール　(4)デルタ　a．頂点の三角地区　b．中部地帯　c．北部地帯　d．5本の中心線　e．ネットワーク関係と生態学的標高差

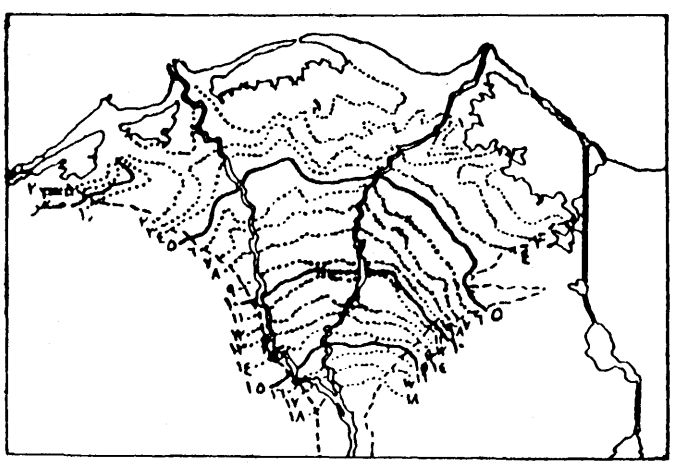
2．地理学的河川　(1)人口密度と都市の分布　a．河川の位置　(2)ナイルと都市の形態学　a．カイロの社会的形態学　b．ナイルと中核的諸都市　(3)エジプトの人間的形態学

ヒムダーンが，3番目にあげる同質性の側面は，居住の同質性（al-tajānus al-'umrānī）である。ここで注意したいのは，本章の'umrānと次章で扱うḥaḍāraとの区別である。両者は，イブン・ハルドゥーンの著作などにみられるよ

図2　下エジプト（ナイル・デルタ）の人口密度と標高との相関関係



شكل ٥ – كثافة السكان فى الدلتا



(شكل ٦) خطوط الكنتور فى الدلتا . قارن مع خطوط ونطاقات كثافة السكان

（出所）『エジプトの個性』（改訂版）第2巻，183，189ページ。

うに，ともに「文明」の意味をもち，相互に微妙な関係性をもつ言葉であるが，本稿では議論の内容から，それぞれ居住と聚落という訳語を当てた。この章の‘umrānとは，具体的には人口分布のことであり，したがって居住の同質性とは，人口分布にみられる同質性を意味するといってよい。

他の重要な叙述の箇所でそうだったように，ここでも人口分布の同質性に決定的な影響を与えたのはナイル川である。ナイルは，エジプトに生命を付与したのみならず，その表面に生命を配置した，すなわち「人間の覆い」を被せたのである（II-p. 166)。

ヒムダーンは，第1節「人間の覆い」(al-ghiṭā‘ al-basharī) で，まず首都カイロ県を除いた全国の人口密度の分布を検討する。その結果，上エジプトの方がデルタより人口密度の同質性が高いこと，そして人口密度そのものが高いと指摘する。また，デルタの場合も，標高の高さに応じて，すなわち北よりは南の方の県が人口密度が高い傾向がある。したがって，エジプト全体でみると，ナイル川の流れに沿う形で，標高の変化，すなわち土地の勾配に従って人口密度が変化してゆく一定の相関関係が検出できるという（II-pp. 193-198)。ここでも，ナイルは，エジプトの人口密度に同質性を付与すると同時に，勾配の原則も通用させている。

第2節「地理的河川」(al-nahr al-jūghrāfī) において，ヒムダーンは，ナイルと都市形成との密接な関係を指摘する。その場合，小都市は人口密度によって規定されるのに対し，大都市（人口5万人以上）は，中央の行政サービスとの関係など都市相互の間の距離が影響する（上エジプトでは約100km，デルタは約50kmの間に配置される）という違いはあるが，いずれにおいても基底的な影響を与えるのは河川である。人間の覆いとしての都市ネットワークに同質性を付与しているのは，ナイルの力である（II-pp. 198-202)。

また，ヒムダーンは，この都市ネットワークにみられる同質性は，川べりや分流点など，河川に対する都市の位置によって規定されると述べ，ナイルと都市の形態学を展開する。その場合，後論との関係で重要なのは，都市の形態学における「社会的な地形学」(tūbūghrāfīya ijtimā‘īya) に対する河川の

影響である。例えば，それは，所得階層別の居住区構成や都市機能の地域分布が，河川との距離によって規定されるという問題である（II-pp. 204-209)。

ナイルは，ほとんどあらゆる人口分布の（'umrānī）現象の構成要因となっている。ナイルは，人口の分布から，人口密度，都市の規模，都市相互の距離，そして村の規模まで規定し，さらには都市の居住区構成やその階級構成の地理的分布をも決定する（II-pp. 209-211)。

4．聚落の同質性

第18章「聚落の同質性」（II-pp. 212-254）の細目次は，以下のとおりである。

第18章　聚落の同質性

1．エジプトの農村　(1)エジプト農村の解剖　a．人工的丘陵　b．円形　c．集合住居　d．計画性なき計画　e.村の分裂：村名の系譜　(2)イズバ革命　a．イズバの性格　b．イズバの行進　c．村とイズバ：あるいは，分散対集住　d．原点への回帰

2．エジプトの都市　(1)発展と成長　a．古典的形態　b．初期の都市計画　c．強制された都市計画　d．複合的な都市計画　(2)エジプトの都市の形態学：前近代都市　a．住宅地区　b．中世の都市　c．前近代都市の斜陽　(3)近代都市　a．構造と形成　b．北部の「海寄りの」位置　c．商業的中心地　d．人口の機能　e．行政　f．サービス　g．工業　h．都市の性格

聚落の同質性（tajānus ḥaḍarī）は，エジプトの農村と都市の双方において観察できる。まず，「農村の同質性」を説明する第1節において，伝統的な村落（カルヤ）の形態は，次のように叙述される。村が作られるのは，ナイルの

氾濫に対する防御のために，丘陵地，しかも大半が土盛りを施した人工の丘陵の上であり，したがって村落の形状は円形であることが多い。この円の中心（そこにはしばしばモスクが建設される）に向かって，周囲の円周から細い路地（袋小路のものも多い）が放射線状に伸びる構造となっている。こうした放射線状の路地をもつ円形の村落形態を，ヒムダーンは，「計画性なき計画」(khiṭṭa bi-lā takhṭīṭ) と呼ぶ。この円形の村落は，蟻塚に似た塊村状の密集家屋が集合するが，これら農家の家屋には，北向きの窓など形態の類似性，建築材料（レンガなど）の共通性がみられる（II-pp. 212-218)。

しかし，近代以降，すでに述べた灌漑制度の改革と土地私有化の進行に伴い，新しい形態の村が建設される。これは，通年水路灌漑の普及がもたらした新耕地に，しばしば親村からの分村の形をとって建設された村であり，一般にイズバ(‘izba)という名称で知られる。ヒムダーンは，この新村の蔟生を「イズバ革命」と名づける。この新村においては，もはや氾濫の防御のための土盛りや立地上の配慮が必要なくなり，農地に隣接して小作農が住み込む規格化された宿舎が地主によって「計画的に」建設される。今世紀初頭，こうしたイズバ建設の「行進」がデルタ北部から南部にかけて開始され，農村の景観は急激に変化していった（II-pp. 220-223)。

しかしながら，時の経過に伴い，イズバの形態にも変化がみられ，初期の極めて規格化された構造から，しだいに伝統的な農村の形態を取り入れたもの（機能的にもモスクなど共同体的施設を併設したもの）へと変わっていった。一方，伝統的農村（カルヤ）の方も，近代的な住居形式が導入され，その結果，次のような「原点への回帰」，すなわち村の形態における同質性の回復がみられるようになる。すなわち，それは，「独立家屋—イズバ—村（カルヤ)」といった三層構造の形成である。あるいは，「村—イズバ」という新しい二重性が，農村の同質性の基礎となったのである（II-pp. 223-227)。

次に，「都市の同質性」を説明する第2節において，ヒムダーンは，農村の同質性についてと似た議論が展開できるとする。すなわち，農村と同様，近代化の影響にもかかわらず都市の同質性は，損なわれなかったし，むしろ新

しい同質的な形態が出現したと結論づける。

彼によれば，農村と都市の聚落形態は，共通してみられる特徴があり，それはそれぞれの国独自の聚落形態の個性ともいえるものである。しかし，近代的な都市化のプロセスは，都市の形態を農村と共通する原型的形態から急速に遠ざけてゆく。ヒムダーンは，その例として，古典的な都市形態とムハンマド・アリー期以降計画的に建設された都市とを比較し，近代的な都市計画の結果，エジプトの多くの都市は，次のような複合的な形態をとるに至ったと述べる。それは，円形の古典的形態の旧市街の脇に，四角形の計画的な新市街が延びる形態である（II-pp. 228-233)。

とはいえ，エジプトの都市の個性は，古典的形態から複合的構造への移行を通じて，同質性を一貫して維持してきた。その意味で，エジプトの諸都市は，他の国の都市とは根本的に区別される強烈な個性を共通してもっている。これに対しむしろ特徴的なのは，エジプトの個々の都市に，独立した個性がないことである（II-pp. 253-254)。

ここでヒムダーンが指摘するエジプトの都市，とりわけ地方都市の没個性的性格は，後論の中央集権性，カイロの卓越性をめぐる議論と関係してくる。

5．人間の同質性

第19章「人間の同質性」（II-pp. 255-359）の細目次は，以下のとおりである。

第19章　人間の同質性

1．古代エジプトの人種の歴史　(1)石器時代の人類　a．旧石器時代　b．新石器時代　(2)古代王朝以前　(3)古代エジプト人　a．出自をめぐる学説：東方ハム人　b．反論　(4)形質人類学　a．古代王朝以前のエジプト人　b．王朝時代のエジプト人：ファラオ的エジプト

2．近代の人種の歴史　(1)同質性と同質化　(2)侵略　a．侵略―ギリシア人の移住　b．中世の諸時代　(3)移住　a．ヒクソス人　b．ユダヤ人　(4)アラブ人の移住　a．アラブ化の人類学　b．移住の諸段階　c．分布図　d．一般的な計測

3．エジプトの人種的個性　(1)人種の基本的構成　a．先史時代の古い基本的構成　b．三つの構成の時期　(2)二次的影響要因　a．人間の歴史的貯水池　b．人名の人類学　(3)人間の必要物に応じた地理的様式　a．時計の針と反対回りの人類の諸時代　b．人類学的「通風口」　c．重心としての北西　(4)同質性のメカニズム：流出なき吸収　a．排出なき進入　b．吸収の王国　c．濾過と吸収の諸要因　(5)地理的形状と人種的形状　a．閉じた箱ならぬ閉じた管　b．鉄の檻なき堅固さ　c．混交しかし同質性の継続

4．我らエジプト人：現代のエジプト　(1)河谷のエジプト人　a．全体図　b．地方の詳細　c．ヌビア人　(2)沙漠の住民　a．東部沙漠　b．西部沙漠

5．プロフィールの比較　a．エジプトとインド　b．エジプトとイタリア　c．エジプトと英国

この同質性の最後の側面，人間の同質性（tajānus basharī）を扱う章において，ヒムダーンは，エジプトの人種的な同質性という刺激的な議論を行なっている。大量のページを割いたその叙述は，きわめて多くの論点を含み，ここでは関連ある部分を極めて簡略にしか紹介できない（できれば稿を改めて，ヒムダーンの民族主義論を紹介するなかで取り上げてみたい）。

ヒムダーンが，冒頭の部分で強調するのは，エジプトは人類発祥の地ではないこと，そしてエジプト人という民族（sha'b）は，むしろ外の地域から移住した多様な人々によって形成されたという点である（II-p. 257）。続いて第1節と第2節で，彼は，古代エジプト人と近代エジプト人とを区別して議論してゆく（ただし，ここでいう「近代」とは古代王朝期を「古代」とし，それ以降

の時期のことを指す)。細目次にあるように，前者については，第1節で，東方ハム人説などの学説を紹介し，後者については，第2節で人種の同質化，すなわち外部から進入した諸民族の同化の過程を叙述している。後者の同質化の過程で注意したいのは，ヒムダーンが，外来の人々の進入の形態を，侵略（ghaz‘）と移住（hijra）に区別している点である。前者は軍事的侵入であり，都市の一部に影響を与えたにすぎないが，後者は農村人口に対しても影響を及ぼした(II-p. 279)。ギリシア人の進入は侵略，ヒクソス人，ユダヤ人，アラブ人の流入は移住の例に挙げられている。

言うまでもなく，後者の移住の人種的影響のなかで，最も重要なのは，アラブの移住である。ヒムダーンは，この問題を「アラブ化（ta‘rīb）の人類学」として分析している。この問題に関するヒムダーンの議論のなかで，重要な指摘を一点だけ挙げるとすれば，それは，イスラーム期以前におけるアラブの移住の言及である（II-p. 298)。『エジプトの個性』第4巻の最終章で扱うエジプト民族主義とアラブ民族主義の関係をめぐる問題の予備的な議論をここで行なっているといえよう。

次の第3節「エジプトの人種的個性」(shakhṣīya miṣr al-jinsīya）で，ヒムダーンは，人種的な同質性について，総括的な議論を行なう。彼は，エジプト人の人種的形成過程を三つの時期に区分する。(1)古代王朝期以前，(2)7世紀のアラブの征服期，(3)11世紀のバニー・ヒラールやバニー・サリームといったアラブの部族が派遣された時期である。これらの時期にそれぞれにおいて流入した様々な人々が，エジプトの人種的同質性を損なわなかった背景には，地理的要因があった。ヒムダーンは，多様な人種が流入する地理的な「通風口」を考察した後，「進入はあれど流出はない」(dukhūl bi-lā khurūj）ところの「吸収の王国」(mamlaka al-imtiṣāṣ）を成立させてきた「同質性のメカニズム」の基盤を，やはりナイルに求める。すなわち，豊かな河川のもつ吸引性と，対照的な沙漠による周囲からの隔絶が，人口が流入しやすく流出しがたい地理的構造を形作っているのだと述べる(II-pp. 315-318)。また，異なった人種の「吸収と濾過」が行なわれる要因として，沙漠による隔絶性に加え

て，人口規模の大きさや，内婚の大きな単位であったことが指摘される（II-pp. 318-320)。言い換えれば，エジプトは，「鉄の檻なき堅固さ」をもつ「閉じた箱ならぬ閉じた管」である。上記のようなエジプトの地理的形状(qālab)が人種的形状に大きな影響を与えているのである（II-pp. 320-324)。

後半の二つの節，「我らエジプト人」と「プロフィールの比較」の紹介は，ここでは省略する。ただし，前者の現代エジプト人の人種的考察で興味深いのは，マイノリティーとしてのヌビア人と沙漠の遊牧民の位置づけであろう。

第4節　統一性，中央集権性，そしてファラオ的専制

本節では，前節に続いて，「エジプトの個性」の諸特徴のなかで，統一性と中央集権性，そしてこれらと関係するファラオ的専制をめぐるヒムダーンの議論を紹介する。ここで検討するのは，第2巻第5部の第21・22章，および第3巻第9部の第39章である。

1．統一性

第21章「政治的統一性」（II-pp. 457-535）の細目次は，以下のとおりである。

第21章　政治的統一性

1．政治的郷土（ワタン）　(1)政治的郷土の自然的基礎　(2)統一性の自然的諸要因　a．外部から　b．内部から　1）構造的統一性　2）機能的統一性　(3)政治的統一の発展　a．発展の諸段階　b．発展の重要性　(4)北部と南部　(5)民族(ウンマ)と国家　(6)政治的郷土は自然的なものか，より相対的なものか　(7)自然的な政治的郷土　a．成熟した政治的地形　b．統一された政治的存在　c．

安定した政治的区画

2．政治的国境　(1)国境の展開　a．新しい古さ　b．人工的性格　(2)国境の地理学　a．国土面積　b．南部国境　c．西部国境　d．東部国境

3．民族的統一性　(1)言語的統一性　(2)宗教的統一性　a．規模と発展　b．地理的分布　c．起源の統一性　d．人口の干渉　e．政治的凝集性　(3)心理的統一性

この章で，ヒムダーンは，エジプトというワタン(waṭan，すなわち郷土＝民族）の政治的統一性（al-waḥda al-siyāsīya）を考察している。彼は，政治的統一性が自然の統一性と民族的統一性の両者の結合によって過不足なく形成されると述べ（II-p. 507），自然の統一性は，(1)立地と(2)位置の相互作用によって，また民族的統一性は，(1)エトノス的，(2)宗教的，(3)言語的，(4)心理的統一性から構成されると考えている。後者の民族的統一性の「四重性」の構成のうち，(2)と(3)は，合わさって「文化的統一性」を形成するという（II-pp. 507-508)。ここでは，ページ数の関係から，上記の政治的統一性の2側面を中心に第1節と第3節を紹介し，第2節の国境の変遷に関する議論は省略する。

(1)　自然の統一性

小河川が政治的単位（waḥda，統一性）を形成する基礎となることが多く，また大河川がしばしば複数の国家の乱立を招く事例に反して，ナイル河谷は，歴史的にエジプトという政治的郷土（al-waṭan al-siyāsī）の統一性を作りだしてきた（II-p. 458)。この政治的統一性の自然的基礎となるのは，(1)「外から」，すなわち外部世界との関係という「位置」（マウキウ）と，(2)「中から」，すなわちナイル河谷そのものがもつ「立地」（マウディウ）の両者である。

まず，第1の外に対するエジプトの「位置」とは，沙漠による外部世界からの隔絶であり，その結果，エジプトは「疑似オアシス」，あるいは「沙漠の

中の孤島，半島」として統一性を保ってきた。しかも，東西の両沙漠は，自然の隔壁であったのみならず，それぞれ東は紅海，西はリビア沙漠という後背地を抱え，中心に向かって傾斜する地形をもち河谷に求心力を与える機能をもっていた。まさにエジプトは，古代以来，多くの沙漠や海に囲まれた島であった（II-p. 460)。

第2の「立地」の条件は，構造的統一性と機能的統一性を作りだす。前者の構造的統一性とは，カタラクト（急流）で区切られ地中海に流れ込むナイル河谷が，人種的人類学的地理的境界線を形成してきたことである。これは，「人間の同質性」で論じたところであり，この点でナイル川は，ほかの大河が国を分ける境界線になる事例とは極めて対照的であった。後者の機能的統一性とは，ナイルに基づく灌漑の働きそのものであり，「ベイスン［水盤］の連鎖」が灌漑の単位の統合を形づくった。さらに，ナイルは水上交通の発展によって統一性を促進させた。

(2)　民族的統一性

この民族的統一性（al-waḥda al-waṭanīya）も，先に取り上げた「人間の同質性」の議論と関係している。特に，民族的統一の第1の側面，エトノス的な（ithnī）統一性は，この人種の同質性に基づいているが，しかしエジプトは外に開かれた社会であり排外主義とは無関係な点を強調している。次の文化的統一性を構成する言語と宗教の統一性もここでは詳しく説明できない（前述のとおり機会があれば別稿で紹介したい)。ただ，ムスリムとコプトの二重性は，民族的統一性，あるいは宗教的統一性と矛盾しない。コプトは，巨大なエジプトという存在の心（ṣamīm）であり，強固な凝集性をもつ民族の体の堅固な一部である（II-p. 525）と述べ，上エジプト中部を「コプト地区」とするような西洋の学者を批判している（II-p. 522)。

民族的統一性の最後の側面，心理的な統一性は，エジプトという環境の（あるいは自然の）単一性（aḥadīya）と密接な結びつきをもつ。それは，近代以前における外敵として遊牧民が果たした歴史的役割（エジプトの中世史は，まさ

にナイルの周期的な大氾濫とベドウィンの侵略という二つの音律によって構成される，II-p. 530)である。近代以降になると，西欧列強による外部からの侵略が心理的な（政治的）統一性を促進させた。

2．中央集権性

第39章「拡張しかし集中性：エジプト，すなわちカイロ」(markazīya raghma imtidād: al-qāhira miṣr, IV-pp. 251-395）の細目次は，以下のとおりである。

第39章　拡張しかし集中性：エジプト，すなわちカイロ

1．地理的集中性　(1)デルタ：結節点のない中央　a．立地と規模の競争　(2)上エジプト：芯のない軸　a．変わりゆく規模　(3)カイロの結節性　a．胴と首，頂点と頭　b．二つの側面の間　c．歴史的局面　d．エジプトの集約

2．機能の集中性：官僚制　(1)官僚制の起源　a．役人たちの国家　(2)官僚制の過重　a．官僚制と社会主義　(3)地理的分布　a．分配の再検討

3．聚落の集中性：首都性　(1)歴史の証言　a．地域的な均衡　(2)膨張の諸要因　a．社会的要因　(3)位置，文明，政治

4．近代エジプト，成長から規模へ　(1)成長カーブ　a．百万人都市　b．首座都市　c．第二都市　d．第三都市　e．諸都市のなかのカイロ

5．国民的計画と地域計画の間の首都性　(1)カイロの比重　a．富者の町　b．最大のピラミッドか最大の膨張か　(2)北部と南部　a．歴史と地理の役割　b．デルタと上エジプトの間　c．記憶に残る計画　(3)カイロの諸問題　a．人口過密　b．住宅問題　c．交通問題　d．環境問題

6．首都の新しい「愚かさ」　(1)提案のリスト　a．政府の計画　b．沙漠のなかの新しい立地　c．現存する立地　(2)反対意見のリスト　a．新しい首都の哲学　b．地理学に対する立地　c．政治的首都かメトロポリタン的首都か　d．集中サービスか通信化した行政か　(3)結論　a．何をもち何をなさねばならないか　b．誤った意見

7．閉鎖的首都　(1)増大から細分化へ　a．増大　b．固定化　c．細分化の戦略　d．単なる政治的首都か　e．地域主義　f．場所の社会主義

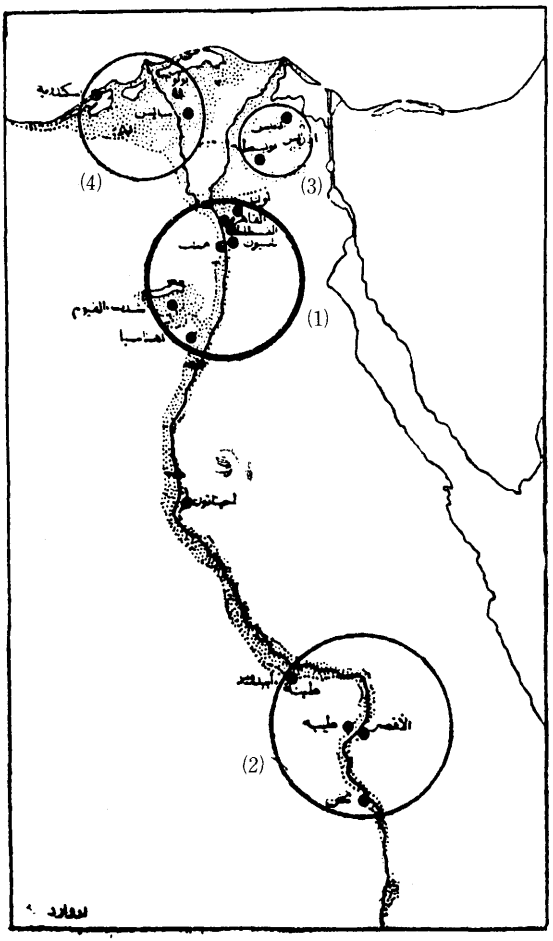
8．地域計画について　(1)地域的都市　a．均衡のとれた複数の首都　b．人口移転の民主主義　c．開発の枢軸　(2)農村構造の再建　a．農村の住宅　b．変化の基準としての農村　(3)行政構造　a．地域区分の基礎　b．エジプトの地図

この第39章では，「エジプト，すなわちカイロ」の集中性(markazīya，中心性あるいは中央集権性）を論ずる。ヒムダーンは，集中性（中央集権性）がエジプトの個性がもつ最も傑出した特徴である，と述べ，この集中性の三つの側面，(1)自然の集中性，(2)行政の集中性，(3)聚落の中央集権性（集中性）を同章の第1～3節で説明する。ここでは，ページ数の関係から，第4節以降の近代カイロ市の近代的発展と都市計画の政策提言の部分は省略する。

(1)　自然の集中性

エジプトの地理的集中性（中央集権性）は，「エジプトとは，面積（misāḥa）ではなく長さ（masāfa）である」(IV-p. 251）という特性から導きだされる。同質性のところで論じたように，外界の沙漠と激しい対照をなすナイル河谷内部の等質性は，没個性的な均質性をも意味した。この等質性が中央集権性と密接な関係をもつことを，ヒムダーンは，交通論の視点から，次のようにナイル・デルタと上エジプトを区別して論ずる。

図3　エジプトの首都の四つの円



（出所）『エジプトの個性』（改訂版）第4巻，266ページ。

まず，デルタを，ヒムダーンは，「結節点のない中央」（tawassu ṭ　bi-lā ʻaqdīya）と形容し，中心や核がない地域としてのデルタの特徴を描写する。また，東西を結ぶ横の軸がないデルタは，鉄道など近代の交通体系が導入されるまで横の交通が発達しなかった（IV-p. 252）。こうした特徴が，古代以来，デルタの大都市が沙漠との境界線や海岸部など周辺に集中してきた背景

にある（II-p. 254）。近代以降，交通体系の変化に伴い，デルタ中央部でも大都市（タンター，マハッラ・エルクブラーなど）が成長したが，しかし，これらデルタ内部の大都市より，アレキサンドリアやスエズ運河3都市（スエズ，ポートサイド，イスマイリーヤ）の成長の方が急速だった。ヒムダーンは，この変化を「かつての自然の結節性（nodality）から人工的な結節性に変化した」（IV-pp. 255-256）と述べているが，灌漑や村落形態の変化（近代化にもかかわらず維持されるエジプトの個性）を説明する際の論法とよく似ている。

次に，ヒムダーンは，上エジプトを「芯のない軸」（miḥwar bi-lā bu'ra）と形容する。上エジプトは，運動の軸とその方向の単一性をもつ「伸びた裂け目，閉じた管，幅のない長さ」とされ（IV-p. 256），デルタと同様，中心性，集中性をもたない周辺として描かれている。上エジプトは，交通論からみると，その狭い河谷において，南北の縦の交通が圧倒的に重要な意味をもつ。これに対し，横の交通の拠点となる次の四つの場所，(1)カタラクト，(2)ケナー―クサイル・ルート，(3)ダルブ・アルバイーン（スーダンからの隊商ルート），(4)ファイユームの首（'unuq）は，いずれも都市形成の立地として適していたが，しかし副次的な役割しか演じず，いかなる意味でも中核的な結節性は作りだすことはなかった（IV-pp. 257-258）。

この「節のない線」（上エジプト）と「芯のない地片」（デルタ）を統合する存在，それが首都カイロであった（IV-p. 260）。以下，ヒムダーンは首都の立地論を歴史的に概説するが，ここでは極めて簡略に紹介する。デルタと上エジプトを合体してエジプト全体を考えると，そこには明確な二つの自然の結節性がそれぞれの地域に存在する。それは，デルタの頂点とケナーである。ただし，歴史的にみると，古代以来，エジプトの首都は，この2カ所を含めて次の四つの円のいずれかに収まってきた。すなわち，それは，(1)デルタの頂点（メンフィス～カイロ），(2)ケナー（テーベ），(3)東北の玄関口（タニスなど），(4)北西の玄関口（アレキサンドリアなど）である（IV-p. 265）。ただし，「エジプトを集約するもの」（talkhīṣ miṣr），現代カイロの中心が，第1の円のなかで，西のファラオ時代の都と東のイスラーム期の首都のちょうど真ん

中に位置する，と述べているのは興味深い（IV-p. 268)。

(2) 機能の集中性

ここでいう機能の集中性（markazīya waẓīfīya）とは，行政の中央集権性，集権的官僚制を意味する。この機能の集中性において最も重要な機能的要素として働いたのが氾濫という環境であり，灌漑が組織化される水利社会においては「誰もが絶対的公権力に服従する」集権的な組織化が促進されてきた（IV-p. 270)。エジプトでは，古代の書記からシャイフルバラド（村長老）[53]に至るまで，重厚で横暴な（'atīya）ファラオ的官僚制の伝統が引き継がれ，土地と労働を支配する政府の権力が社会の内部に浸透した「政府的社会」（mujtama' ḥukūmī)が形成されてきた(IV-p. 270)[54]。すなわち，灌漑農業を管理するテクノクラートを中核として，その周りに水の価格を計算する財務機関，水の諸権利をめぐる治安を管理する警察機関など「監察と連結」(al-ẓabṭ wa al-rabṭ)の官僚機構が増殖する構造が存在した（IV-p. 272)。

例えば，前近代のベイスン灌漑期において，氾濫の時期を決定する絶対的な権力をもつ灌漑省（公共事業省）は，エジプトの生命（ḥayā miṣr）そのものであったし，そして近代以降の通年用水路灌漑体系への移行は，この水利的一官僚的構造の拡幅をもたらしたのである(IV-pp. 272-73)。したがって，大規模に膨れ上がった現代の官僚機構が，ムハンマド・アリー期に始まると考えるのは当然のことである。こうしてエジプト社会は「役人たちの社会」となり，都市は「役人たちの都市」となった。役人たちの軍団は，国家が唯一の事業主である社会において一つの階級を構成した。彼らは，都市のブルジョアジーと密接な関係をもったが，この点でヨーロッパやあるいは近隣のシリアなどの国の都市ブルジョアジーが商人層と結びついたのと対照的であった（IV-p. 273)。

ヒムダーンは人口や労働力に占める公務員の比率の高さを国際比較の数値で示すことによって，現代エジプトにおける官僚制の過重が，1952年革命後の社会主義体制以降，その極限に達したと論ずるが，しかし，この官僚制を

めぐる状況は，「エジプトという存在の根深く終始変わらぬ特徴」であるとも述べている（IV-p. 276)。

(3)　聚落の集中性

「聚落の（ḥaḍarī，文明の）集中性，すなわち首都性」と題したこの第3節では，「カイロが赴くところエジプトも赴く」といった言葉に表現される「尋常ならざる首都への集中性」を説く。まず，「歴史的証言」の形でカイロ市の膨張の近代史を語った後で，膨張の「社会的要因」の重要性を強調する。すなわち，「首都の専制的な膨張性と地方の極端な脆弱性」の背景には，エジプト社会に特徴的な階級構成の問題がある。すなわち，（次項で述べる予定の）ファラオ的封建制的専制と，この御しがたい（jāmiḥa）ほどの集中性との間には，有機的な関係が存在する，すなわち暴力的な集中性とは，政治的専制や社会的封建制の行政的聚落的な翻訳にすぎない（IV-p. 283）と述べる。

ヒムダーンによれば，エジプトの都市システムにおけるピラミッド構造は，社会の階級ピラミッドと対応性をもち，両者とも広く平べったい底と，高く尖った頂点をもち，両極の間の中間層がほとんど欠如している構造を共有している（IV-p. 284)。例えば，「革命以前の農業封建制」は，機能的には都市に居住する地主に対する農村の農民という二つの階級に翻訳が可能であった。その後，1952年革命によって「封建制」が打倒されて「社会主義」の時代になり，さらにその後は「反動的資本主義の復活」の時代を迎えたが，首都と農村の間にみられる階級分割の構造は変わらなかった。むしろ，インフィターフ政策は，「アメリカの一部」と化したカイロのさらなる膨張を招いた（IV-p. 284)。その結果，「我々は社会主義的な社会，社会主義的な国家の只中に，事実上資本主義的な首都をもつことになった」。こうした新しい意味で，エジプトの階級区分は，現在でも基本的に首都と農村の地理的分割に基礎を置いているのである（IV-p. 285)。

3．ファラオ的専制

第22章「ファラオ的専制から社会主義革命へ」（II-pp. 536-599）の細目次は，以下のとおりである。

第22章　ファラオ的専制から社会主義革命へ

1．エジプトの社会地理学について　(1)ナイル川の社会的生態系　a．水利社会　b．政府と社会　(2)社会体制　a．封建制論　b．奴隷制論　c．アジア的体制論

2．ファラオ的専制　(1)東洋的生産社会　a．専制の起源　(2)体制の構造　a．独裁　b．官僚制　c．聖職者　d．軍人層　e．封建領主でも，貴族でも，ブルジョアジーでもなく　f．民衆ブロック　(3)数々の増幅要因　a．地理的環境　b．居住様式　c．経済的単一性　d．外国の帝国主義支配

3．中世の諸時代　(1)東洋的封建制？　a．封建制の諸形態　(2)階級ピラミッド　a．政府就業者と宗教的知識人　b．社会の基礎　c．民衆の抵抗

4．近代エジプト　(1)封建制の生成　a．階級ピラミッド　b．民衆の抵抗

5．エジプトの社会的個性　(1)専制の大地？　(2)沈殿物と汚泥　a．誤った理論　(3)容疑と弁護　a．別の側面　(4)責任の階梯　a．民主主義こそ文明

ヒムダーンの『エジプトの個性』において，最も注目を集めてきた部分の一つが，この第22章が扱う「ファラオ的専制」をめぐる議論である。ここで彼は，東洋的専制論とその風土決定論に対する批判を展開する。本稿では，第2・3・4節の歴史叙述（古代エジプト，中世の諸時代，近代）の部分は簡単な説明にとどめ，問題提起の第1節と結論の第5節を中心に紹介を行なう。

(1)　ファラオ的専制から社会主義革命へ

冒頭でヒムダーンは，政治的専制と河川的環境を結びつける理論の存在を指摘し，モンテスキューに遡るこの理論が19世紀以降のヨーロッパで様々な学派において広まったこと，特にエジプトに関しては，ウィットフォーゲル（Karl Wittfogel）が代表する議論によって典型的なモデルとされた研究史を概観する（II-pp. 536-537）。そして，彼は，この議論を批判的に吟味するにあたり，「政治的社会的現象それ自体と，生態学的（環境的）諸関係」という二つの側面を区別する必要がある，と注意を喚起している（II-p. 537）。

ヒムダーンは，「氾濫的環境と人工灌漑がエジプトという存在の否定できない基本的事実」（II-pp. 537-538）であり，エジプトが「水，農民，支配者の三者からなる典型的な水利社会」（II-p. 540）であることを認める。例えば，前近代のベイスン灌漑の場合，上流のベイスンが下流のベイスンの生死を左右し，用水路の先端部の住民が末端の住民の水の権利を規制する関係が存在し，このナイル河谷内部の水利関係は，流血の抗争に発展する可能性があった（II-p. 538）。また，近代初頭の通年用水路灌漑への転換期においては，タフターウィー（Rifāʻa Ṭahṭāwī）の記述にみるように，村や郡（キスム）がそれぞれの堤防や用水路をもち，その用水の享受は住民に限られていたが，彼らの間には「公けの性格をもつ協約関係（rawābiṭ ʻumūmīya）」が存在せず，それゆえ水路の近くの地主や富農が灌漑水を独占して，水路から離れた農地の農民は恩恵にあずからない（氾濫期のみの用水利用が続いた），という不平等な関係が存在した（II-p. 539）。政府が当時，水路法（1894年法）を施行して，水利関係に介入した背景には，こうした事情が存在した。

それゆえ，「支配者は農民と河川の間の連結辞（ハムザトルワスル）」となり，また「政府は環境と人間を生態学的に統合する道具」となった（II-p. 539）。その場合の政府とは，水利裁判所（water court）の機能をもつがゆえに，タフターウィーが述べるごとく「公正（ʻadl）こそ文明（ʻumrān）の基礎」という原則が通用してきた（II-p. 540）。

続いて，ヒムダーンは，エジプトにおける国家と社会の関係に関して，「中央集権的政府と協同体的社会」は，「氾濫するエジプト」という存在の二つの決定的な現象である，と結論づける（II-p. 544)。彼は，「政府の中央集権性は必然的」とする様々な学者の意見を紹介する一方で，エジプト社会を「有害な血なまぐさい個人主義（fardīya）を知らず」，水利事業における互助労働（'awna）に象徴される自発的な協力に基づいた「協同体的に組織された（ta'āwnī munaẓẓam）社会」であり，地域的な利己主義がなく，社会的連帯と統合度が高い社会（これには人口密度の高さが関係する）と形容する（II-pp. 543-544)。それゆえ，河川システムとナイルの生態系は，協同体的社会主義が形成される隠れた要素だったといえるのであり，まさにこのナセルの協同体的（協同組合的）社会主義体制において，エジプトは農業省に管理される単一の経営単位となったのである（II-p. 545)。ここの叙述をみるかぎり，協同体的エジプト社会を賛美するヒムダーンの議論には，ナセル時代以降の国家統制的な農業政策に対する批判はうかがえない。

このように，水利社会論を展開した後で，ヒムダーンは，「専制や暴政（それが東洋的であろうとなかろうと）は，河川的環境（それがナイルであろうとなかろうと）からは結論づけられない」，また「暴政がもたらすあらゆる腐敗は，灌漑農業や河川の地理とは何らの関係ももたない」と述べる（II-p. 546)。すなわち，「河川の統御（ḍabṭ）」なくして農業が成り立たないのは確かとしても，しかし，その場合「民衆の統御」は，果たして必要であっただろうか（II-p. 538)。もしそうでないとすれば，「専制の起源は，地理の外に，すなわち河川の外に，エジプトの歴史そのもののなかに求めざるをえないのではないのか」（II-p. 546)。こうしてヒムダーンは，専制の起源を「地理の外に」，すなわち歴史のなかに求めてゆく。

(2) ファラオ的専制の歴史的展開

古代から近代に至るエジプトの「社会体制」について，封建制，奴隷制，アジア的体制の各概念を検討した結果，ヒムダーンは，エジプト的社会構成

体には，全体論的な単一論的な分析は通用しない，と結論を述べる（II-p. 550)。すなわち，エジプトのマルクス主義的歴史家のイブラヒーム・アーメル（Ibrāhīm ʻĀmir）やアハマド・サーディク・サアド（Aḥmad Ṣādiq Saʻd）が主張するように[55]，歴史を通じて支配的な様式が，アジア的あるいは東洋的なものだったことは認めるが，同時に奴隷制，疑似奴隷制，封建制，疑似封建制などの各様式を歴史発展の過程で検出することができる（II-p. 550）と語り，以下の節で各歴史段階の体制分析・階級論を展開する。

最初に，ヒムダーンは，古代王朝期のエジプト社会を次のように論ずる。エジプトは歴史上最初の統一国家，最古の中央集権国家であると同時に，最初の専制政治が登場した国でもある。この「ファラオ的専制」は，中央集権国家の必然的産物であり，さらに中央集権国家は氾濫的環境の必然的産物でもあった（II-p. 555)。ナイル河谷に統一国家が成立する歴史は，同時に「水の分配者が水の所有者に転ずる」（II-p. 554）過程でもあり，河谷を単位とする水の統御を行なった古代王朝は，歴史上生産過程の組織化に介入した初めての国家であった（II-p. 552)。農民が支払う「水の対価は，国家に譲り渡した自由」そのものであり，強制労働に動員された彼ら「ナイルの奴隷」は，いわゆる「総体的奴隷制」のもとに隷属した（II-p. 553)。このようにエジプト人は，歴史の初めから政治的統一のために政治的自由を譲り渡してきたのである（II-p. 555)。

ヒムダーンは，以下，ファラオ的専制体制の独裁を生みだす構造として，官僚制，聖職者，軍人層という三つの柱について叙述した後，「中世の諸時代」イスラーム期における東洋的封建制をめぐる議論を紹介し，最後に近代以降，ムハンマド・アリーが，この古い封建制を破壊すると同時に新しい封建制を作りだした過程を説明する。内容の紹介はここでは省くが，いずれの時代においても民衆の反抗の諸形態に言及している点が注目される。

(3)　エジプトの社会的個性

「エジプトは専制の大地か？」という設問に続いて書かれた次の文章は，

『エジプトの個性』のなかで印象に残る名文の一つである。

「エジプトの歴史は，以下のことを否定するすべを知らない。それは，絶えず非人間的であり，またしばしば暴力的でもあった専制あるいは圧政が，個人的な説明や学術的な比較を超えた客観的で現実的な現象として，エジプト人民の歴史ドラマのなかのライトモチーフを，不幸にも悲壮な旋律を奏でてきたことであり，そしてエジプトが世界最大の監獄とは言わないまでも，世界最古の監獄であったことである」(II-p. 580)。

しかし，この専制というエジプトの社会的性格がもつ特徴は，果たして宿命的な遺伝的 (mawrūtha) なものか，それとも獲得的な (maktasaba) ものなのか。これに対する彼の答えは，エジプトにとって，専制とは「時代精神」(rūḥ al-'aṣr: Zeitgeist) ではあっても，決して「地霊」(rūḥ al-makān: genius loci) ではなかった (II-p. 581) という結論である。すでにみたように，氾濫的環境は搾取や略奪とは無縁な協同体的な社会主義を作りだしてきたのであり，その結果，エジプトの本当の社会的個性は，腐敗や抑圧とはかけ離れた，集団的かつ協働的な性質を帯びている。その意味で，エジプトは，決して「専制の大地」ではなかった (II-p. 582)。

またヒムダーンは，民主的な西洋と専制的な東洋という二項対立的な図式に疑問を示し，専制は世界のどこにでも存在した (II-p. 581) と述べ，政治的専制と氾濫的環境を結びつける地理的決定論は，前世紀にイギリス帝国主義が広めたものだと批判する (II-p. 583)。こうした議論は，「ナイル川の統御がなければエジプトは荒野となり，統御されればエジプトが監獄と化す」という二者択一を迫る理論である。しかし，文明と名誉，安定と自由，社会的対立と社会的公正のそれぞれは，同時に求めがたいものであろうか (II-p. 582)。

このエジプトの社会的性格，ファラオ的専制をめぐるヒムダーンの議論の後半部分は，外国人によって作られてきたエジプト人の民族的性格をめぐる言説に対する批判，そして民族的な自己批判に当てられる。前述したように，彼にとって「専制とは，歴史学的事実であって，地理学的事実ではない」(II

-p. 582)。しかしながら，ナイルとその人工灌漑が過去における専制の腐敗に責任がないとしても，エジプトの個性に隠微な形で受け継がれている沈殿物や汚泥，過去の残滓の存在を否定することは難しい(II-p. 589)。また，ナイルがファラオ的専制の客観的原因であったか，それとも意味のない例証にすぎなかったのか，そのいずれが正しいとしても，エジプトが，早期の政治的統一と政治的安定のために，自由と民主主義と名誉を犠牲にする対価として支払ってきたことは否定できない（II-p. 584)。

このようなエジプト人のファラオ的専制への隷属状態に関して，外国の多くの論者は，「隷従の数世紀」を送ってきた「歴史的に病んだ国民」，あるいは支配に屈しやすく歴史的に一貫して奴隷根性をもつ国民という言説を作り上げてきた(II-pp. 589-590)。農民の従順性という言説を作った帝国主義者のクローマー（イギリスの高等弁務官）やベアー（イスラエルの経済史家）はその代表であるが，アフガーニーやカワーキビーといった革命のイデオローグでさえも東洋的専制をめぐる言説に同調したことが示すように，この「繰り返される音律」から我々は逃れることができない(II-p. 589)。そして，こうした言説は，エジプトがナイルの統御に依存し，ナイルの統御は支配と支配者の公正さに基づくという議論を過度に強調したところに成立している(II-p. 591)。また，こうした言説の「別の側面」として，民衆が支配者に対して卑屈や偽善の態度をとる精神風土を強調し，「偽善の大地」(arḍ al-nifāq) としてエジプトを描く議論が横行している。ヒムダーンは，この言説が民衆の革命性を否定している点を批判する（II-pp. 592-593)。

以上の外国人による「エジプト的性格」に対する批判を終えた後，ヒムダーンは，この章の結論部分で民族的な自己批判を行なう。彼によれば，「国内の圧政と国外からの侵略，すなわち内部の独裁と外部からの帝国主義は，エジプトの個性の二つの基本的弱点（汚点と言わないまでも）であった」。しかし，「我々が専制的支配者に従うときにはいつも，我々の支配者は外国人の侵略に簡単に屈伏した」という歴史的事実が示すように，実は専制と帝国主義の両者は，直接的な因果関係をもっている(II-p. 594)。そして，カワーキビー

が正しくも指摘したように,「圧政者が専制を作りだすのではなく,民衆が専制と圧政を作りだす」のであり,それゆえ[エジプトの個性の弱点の]「責任は,第1に基本的原因として民衆に,第2に直接的原因として支配者に,そして第3に副次的に帝国主義に」帰せられるべきものである(II-pp. 595-597)。このように「責任の階梯」を述べた後で,ヒムダーンは,最後の「民主主義こそ文明」の項で,歴史的事実である「専制と独裁が,長い過去の悲しむべき残滓であると同時に,現在の後進性がもたらす自然の諸結果である」と語る。そして,「エジプト人は,歴史の長老(shaykh),文明の賢者(ḥakīm)であるかもしれないが,現代文明,特に現代政治に対しては新参者である。言い換えれば,エジプトは,歴史的に最古の民族だが,政治に関してはまだ思春期の若者なのである」と結論づけている(II-p. 598)。

むすびにかえて

以上でファラオ的専制を論じた第22章の紹介を終えるが,筆者の力量不足もあり,ヒムダーンの流麗な文章で綴られた多岐にわたる複雑な議論を十分に汲み取って,的確な説明ができたとは思えない。特に,ファラオ的専制をナイル川の人工灌漑と結びつける地理学的説明に対して,作者がどれほど一貫した態度を取っていたのか,判然としない部分が残る。例えばファラオ的専制の歴史的形成に関する叙述に,結論部分と矛盾した箇所がうかがえないだろうか。すなわち,中央集権性(集中性)とファラオ的専制の間,あるいは中央集権性と対をなす協同体的社会と専制との間に,画然とした因果関係の断絶を設定しようとする議論には,一貫性を欠くところがあるのではないかという一抹の危うさを覚える(例えば,聚落の集中性と専制との関係を論じた部分とこのファラオ的専制論批判の部分の間にみられる差異)。これは,前述のヒムダーンの言葉を借りれば,「生態学的諸関係と政治的社会的現象」との間の区別をめぐる問題である。

ヒムダーンの巨象のような著作のほんの一部を，しかも時間的余裕もなく紹介した本稿において，この理想的巨人の地理学的方法論を批判的に解釈する作業は，筆者の能力からいっても到底できるはずもない。しかし，上記の問題点との関連から，ここで紹介したヒムダーンの「同質性」，「統一性」，「中央集権性（集中性）」，そして「ファラオ的専制」という「エジプトの個性」を構成する基本的諸特徴の相互関係について，「むすびにかえて」若干の論点を示しておきたい。

本書を詳しく検討する作業に入る前に立てた予想として，筆者は，実は上記の基本的諸特徴の間，とりわけ，同質性と中央集権性の間の相互関係について，何らかの叙述がなされるものと期待していた。すなわち，これらの諸特徴の配列には，一定の因果関係をもった論理的秩序が存在するものと考えていたわけである。例えば，一つの社会の同質性は，中央集権性を生みだす基盤であるとともに，むしろ同質性そのものが強力な中央権力によって人為的に生みだされる関係が，すなわち中央集権による同質化の過程が想定された。しかし，すでに紹介したように，筆者の読解したかぎりにおいて，両者の間には直接的な因果関係が説明されているとは思えない。むしろ，上記の諸特徴は，相互にまったく無関係にとは言わないまでも，エジプトの立地と位置に基づいて，それぞれ独立的に発生して地域的個性を構成してゆくような叙述がなされている。特に，その場合，ナイル川こそがこうしたエジプトの地域的個性の基本的諸特徴，すなわち同質性と統一，中央集権性の形成に大きな影響を与えている。すなわち，これらの特徴は，それぞれ相互の間よりもむしろナイル川とより個別的な強い因果関係で結ばれていることを示唆する叙述がなされている。乱暴な言い方が許されるなら，これらの諸特徴は，ヒムダーンの言う「生態学的諸関係」の局面において地域的個性を形作っているのであって，それらは社会科学的な分析の対象である「政治的社会的現象」，あるいは（ファラオ的専制のような）「歴史的事実」からは明確に区別されている。後者の分析に基づくなら，おそらく上述の同質性と中央集権性の関係の問題は，より鮮明な形で歴史的考察の俎上に載せられていたであろう。

先に述べたように，ヒムダーンの方法論を近代地理学の学説史的発展のなかに位置づけて論ずることも，また中世イスラーム地理学の伝統の継承を論ずることも，いずれも筆者の任ではない。ただし，こうした議論とどのような関係をもつのかといった問題は専門家の手に委ねるとしても，『エジプトの個性』にみられる歴史認識には，彼の思考が編みだした独特のパターンが検出できるという点を，ここで指摘しておきたい。現代の「ファラオ的専制」をもたらした原因の一つとして「後進性」を指摘するヒムダーンであるが，しかし彼は，単純な近代化論的進歩史観はとらない。むしろ，本書にみられるのは，直線的な一方向的な歴史の流れではなく，時代を超えて地域的個性を存続させる円環的な歴史の流れである。とりわけ，同質性の諸側面をめぐる叙述に典型的にみられるように，近代以降の急激な技術的社会的変化にもかかわらず，地域的個性を構成する基本的特徴は，再編成されて維持され，場合によっては強化されたのである。そして，こうした叙述のなかで，今回取り上げた特徴のうち「ファラオ的専制」について，これを地理的事実から除外して歴史的考察の対象としようとしたヒムダーンの態度と，第1節で述べた彼の個人的経験の世界を重ね合わせて考えるとき，本書にかけた作者の熱意と悩みがうかがえるようにも思う。

本書は，その注や引用が示すように数多くの文献を渉猟し，エジプトをめぐって外国人（特に西洋人）が叙述し蓄積した膨大な言説の批判的集成を試みた作品だとも言える。この言説の百科事典的な集成を，ヒムダーンは，まさに民族主義（ワタニーヤ）の地理学者として，地理学的なイデオローグとして，壮大な民族主義的言説の体系に作りかえた。そして，この労多く孤独な作業のなかで，彼の前に立ちはだかった最大の言説がおそらくファラオ的専制であり，また専制と結びついた「歴史的に病んだ」エジプト社会の性格であった。彼は，この社会的政治的現象を，地理学的な事実である「地霊」として扱うことを拒否し，東洋的社会をめぐる西洋人による偏見に満ちた言説を批判した。しかし，第1節で示したように，彼を隠遁の研究生活に追いやったのは，まさにこの彼が批判した言説が表現する現代エジプト社会の病弊で

あったのではないか。また，彼は，一方で水利社会論によって協同体的社会主義の可能性を明るく語りながら，現実には「専制的な」ナセルの社会主義体制の抑圧の直中にその身を置き，同時代の社会と政治に熱い眼差しをもちながら長い「隠遁」生活を送った。このようにヒムダーンの作品を彼自身の個人史の文脈に重ね合わせて吟味するならば，そこには彼のエジプト社会に対する葛藤に満ちた感情的関係が浮かび上がってくるように思えるのである。

〔注〕

(1)　本稿では，Jamāl Ḥamdanをエジプト口語表現に基づき「ガマール・ヒムダーン」と表記する。この点については，国際大学の小杉泰氏からご教示をいただいた。ただし，ヒムダーン自身は，英語論文などでは筆者名をGamal Hamdanとしているし，弟の'Abd al-Ḥamīd Ṣaliḥ Ḥamdān教授（注(23)を参照）もやはり欧語表記ではHamdanとしているから，正式の「家の名」はおそらく「ハムダーン」が正しいのではないかと推測する。また，その著書*shakhṣīya miṣr*の表題も，shakhṣīyaを従来の「性格」という訳語に代えて，本稿では「個性」という言葉を当て，『エジプトの個性』とした。その理由については，本稿第2節を参照されたい。本稿で取り上げるガマール・ヒムダーンの主著『エジプトの個性』については，同作品を資料の一つとして書かれた奴田原睦明『エジプト人はどこにいるか』（第三書館，1985年）という名著がある。また，筆者自身も次の拙稿で取り上げたことがある。長沢栄治「エジプト資本主義論争の構図と背景」（長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所，1990年），特に「〈補論〉エジプトにおけるアジア的生産様式概念の受容」（201～202ページ）を参照。

(2)　長沢栄治「エジプト」（『アジア経済』第36巻第6・7合併号〈通巻600号記念特集「日本における発展途上地域研究1986～94・地域編」〉，1995年7月）。

(3)　伊能武次「エジプトの中央・地方関係」（伊能武次編『中東諸国における政治経済変動の諸相』アジア経済研究所，1993年）126ページ。

(4)　伊能武次「中東諸国の政治と国家へのアプローチ」（伊能武次編『中東の国家と権力構造』アジア経済研究所，1994年）を参照。

(5)　加藤博「エジプトにおける社会経済変動と空間編成の変容―近代エジプト『定期市』研究序説―」（伊能編『中東諸国における…』）75～77ページ。

(6)　Ervand Abrahamian, "European Feudalism and Middle Eastern Despotisms," *Science & Society*, Vol. 39, No. 2, Summer 1975.

(7)　モザイク社会論批判については，ブライアン・S・ターナー（樋口辰雄訳）

『イスラム社会学とマルキシズム—オリエンタリズムの終焉—』第三書館，1983年を参照。

(8) イランのガナートと地主制成立の関係については，日本人研究者の岡崎正孝・大野盛雄両氏の実証研究が知られている。岡崎正孝『カナート—イランの地下水路—』論創社，1988年。大野盛雄『ペルシアの農村—むらの実態調査—』東京大学出版会，1971年。

(9) 意外なことに，先駆的研究者ベアー（Gabriel Baer, *A History of Land Ownership in Modern Egypt 1800-1950*, London & New York: Oxford University Press, 1962）に典型的にみられるように，エジプト地主制研究において，地主による水支配の問題は研究対象にあまり取り上げられていない。この点で，次の加藤の研究は，例外的な貢献であった。加藤博「十九世紀中葉におけるエジプト灌漑行政」（加藤博『私的土地所有権とエジプト社会』創文社，1993年）。また，現代の灌漑制度改革の経緯と農民社会との関係については，以下の拙稿を参照。長沢栄治「近代エジプトにおける灌漑制度の展開」（堀井健三編『アジア灌漑制度比較研究試論』大東文化大学現代アジア研究所，1994年），同「エジプト—灌漑制度改革の新段階—」（堀井健三・篠田隆・多田博一編『アジアの灌漑制度—水利用の効率化に向けて—』新評論社，1996年）。

(10) *Al-Ahrām*紙（1993年4月20日）記事。

(11) 一例をあげると，*Al-Ahrām*紙（1992年4月6日）の記事は，上エジプトのエスナーにおいて，あるスーフィーの聖者の聖誕祭（マウリド）で「非道徳的な」舞踊を披露した民間芸能一座に対し「過激派」が襲撃した事件を紹介している。

(12) 本稿を執筆後，カイロのマハルーサ情報センター（Markaz al-Maḥrūsa li-l-Nashr wa al-Khidmāt al-Ṣaḥafīya wa al-Ma'lūmāt）に依頼して，死後1年間にエジプトの主要雑誌・新聞に掲載されたヒムダーンに関する論説・関連記事の収集を行なった。同センターが作成したファイルは合計103点に達し，彼の死が当時のエジプトの知的世界に与えた衝撃の大きさを示すものといえるが，今回原稿を修正するにあたって，時間的制約からこの資料を十分に使用することはできなかった。別の資料を含め，また次の機会を待ちたい。

(13) Ghālī Shukrī, "miṣrī min zamān-nā" ［我らの時代のエジプト人］, *Al-Qāhira*, No. 126 (1993年5月).

(14) ibid., p. 9.

(15) Ḥasan Ḥanafī, "istīratijīya al-isti'mār wa al-taḥrīr" ［帝国主義の戦略と解放］, *Al-Qāhira*, No. 126 (1993年5月), p. 54.

(16) Jamāl Ḥamdān, *shakhṣīya miṣr* ［エジプトの個性］, Vol. 3, 1984, Cairo: 'Ālam al-Kutub, p. 62.

(17) Maḥmūd 'Abd al-Faḍīl, "jamāl ḥamdān wa ramzīya al-mawqif" [ガマール・ヒムダーンと立地の象徴性], *ḥiwar ma' al-mustaqbal* [未来との対話], (*Kitāb al-Hilāl*, No. 531), Cairo: Dar al-Hilāl, 1995 年 3 月, p. 78.

(18) Shukrī, "miṣrī min…," pp. 12, 18.

(19) 例えば, *Al-Ahrām*紙(1993年 4 月19日)記事や, *Rūz al-Yūsuf*誌(No. 3388, 1993年 5 月17日) を参照。

(20) 'Abd al-Fattāḥ Maqlad al-Ghunaymī, *al-duktūr jamāl ḥamdān fī dhākra al-tārīkh* [歴史の記憶のなかのガマール・ヒムダーン博士], Cairo: Dār 'Aṭāwa li-Ṭibā',1993, pp. 48, 134.

(21) ヒムダーンの狷介さについて, 例えば, ゴネイミーは, 菓子を持参しおもねる態度を取った弟子を出入り禁止にした逸話などを紹介している (ibid., p. 134)。

(22) ゴネイミーによると, 『エジプトの個性』の改訂版をダール・ヒラールが出版したとき, ヒムダーンは, この政府系の出版社の建物の中に入るのを拒んで, 路上で印刷された本を受け取ったというほど, その態度は徹底していたという (al-Ghunaymī, *al-duktūr jamāl*…, p. 144)。

(23) 'Abd al-Ḥamīd Ṣāliḥ Ḥamdān, *ṣāḥib shakhṣīya miṣr wa malāmiḥ min 'abqārīya al-zamān*, Cairo: Maktaba Madbūlī, 1993.

(24) ibid., p. 7.

(25) ibid., p. 10.

(26) ibid., p. 11.

(27) al-Ghunaymī, *al-duktūr jamāl*…, p. 17.

(28) ibid., pp. 30-31.

(29) ibid., pp. 17-19.

(30) ibid.; 'Abd al-Ḥamīd Ḥamdān, *ṣāḥib shakhṣīya miṣr*…, p. 16.

(31) al-Ghunaymī, *al-duktūr jamāl*…, pp. 22-23.

(32) ヒムダーンの先生であるスレイマーン・フザッイン (Sulaymān Ḥuzayyin) は, エジプト地理学協会の会長を長く務めたエジプト地理学界の中心的研究者である。近著に*ḥaḍāra miṣr - arḍ al-kināna* [エジプト文明—キナーナの土地—], Cairo: Dar al-Shuruq, 1991がある。

(33) 留学中の彼は, マクリーズィーの翻訳を考えるほどアラブの歴史家・地理学者に関心を抱く教授に師事し, そして結婚も考えた女友達にも出会ったという ('Abd al-Ḥamīd Ḥamdān, *ṣāḥib shakhṣīya miṣr*…, pp. 32-33)。

(34) al-Ghunaymī, *al-duktūr jamāl*…, p. 42.

(35) ibid., p. 32.

(36) ibid., p. 41.

(37) 'Abd al-Ḥamīd Ḥamdān, *ṣāḥib shakhṣīya miṣr*…, p. 39.
(38) ibid.
(39) ibid., pp. 40-41.
(40) ibid., p. 40.
(41) al-Ghunaymī, *al-duktūr jamāl*…, pp. 42-43.
(42) ibid., p. 45.
(43) ibid., p. 24.
(44) ibid., p. 44.
(45) ibid., p. 39.
(46) ibid., p. 49.
(47) 'Umar Fārūq, *thalāthīya ḥamdān* [ヒムダーンの三層性], (*Kitāb Hilāl*, No. 533), Cairo: Dār al-Hilāl, 1995年5月.
(48) Shukrī, *miṣrī min*…, p. 9.
(49) Muḥammad 'Uṣfūr, "jamāl ḥamdān wa al-islām wa al-siyāsa" [ガマール・ヒムダーン　イスラームと政治], *al-Qāhira*, No. 126 (1993年5月), p. 84.
(50) Fatḥī Muṣaylahī, "jamāl ḥamdān fī al-madrasa al-jūghrāfīya" [地理学派におけるガマール・ヒムダーン], *al-Qāhira*, No. 126 (1993年5月).
(51) 長沢「〈補論〉エジプトにおけるアジア的生産…」を参照。
(52) エジプト的性格論争については，板垣雄三「自画像の探究—「エジプト的性格」論争—」(板垣雄三『歴史の現在と地域学—現代中東への視角—』岩波書店，1992年〈初出1968年〉) を参照。この主題をめぐっては，1920年代以降今日に至るまで多くの著作が発表されてきた。近年の文献としてここでは，コプト教徒の代表的政治家，ミーラード・ハンナー (Mīlād Ḥannā) の『エジプト的性格の七つの柱』(*al-a'mida al-sab'a li-l-shakhṣīya al-miṣrīya*, Cairo: Dār al-Hilāl, 2nd ed., 1990) を挙げておく。この本は，1980年代以降の宗派紛争の激化を背景にして，あらためて国民統合のあり方を追求した本であり，それ以前の同論争に関する議論との時代的差異を感じさせる。
(53) 『エジプトの個性—場所の天性に関する研究—』(*shakhṣīya miṣr: dirāsa fī 'abqārīya al-makān*) は，1967年6月にダール・ヒラール (Dār al-Hilāl) 社の月刊小冊子*Kitāb al-Hilāl*のシリーズの一冊として世に出た。その後，500ページを超える第2版が出されたといわれるが('Abd al-Faḍīl, "*jamāl ḥamdān*…," p. 66)，筆者は未見である。その後，初版は，ヒムダーンの死の直後に，やはり*Kitāb al-Hilāl*のシリーズで再版されている (同No. 509, 1993年5月)。本稿で用いた『エジプトの個性』は，全4分冊の改訂版であり，いずれもアーラム・クトブ ('Ālam al-Kutub) 社から，1980年に第1巻，81年に第2

巻，84年に第3巻と4巻が刊行された。

(54) 近代以降の村落行政と末端政治における中央—地方関係を研究した論文として，以下の拙稿を参照のこと。長沢栄治「近代エジプトにおける村長職をめぐる権力関係」（伊能武次編『中東の国家と権力構造』アジア経済研究所，1994年）。

(55) イブラヒーム・アーメルについては，その代表作『土地と農民』（*al-arḍ wa al-fallāḥ*）を紹介した長沢「エジプトにおける資本主義論争…」を参照。また，アジア的生産様式論・社会構成体論をめぐって数多くの研究を残したサアドについては，以下の拙稿を参照。長沢栄治「エジプト人ユダヤ教徒とマルクス主義—アハマド・サーディク・サアド研究(1)—」（『一橋論叢』第116巻第4号，1996年10月），同「あるエジプト知識人による民衆的思想への接近—アハマド・サーディク・サアド研究(2)—」（『上智アジア学』第14号，1996年12月）。